

幼児の教育 第114巻 第4号 平成27年9月1日発行 ISSN0289-0836

子ども学の源流を次世代につなぐ

幼児の教育

[特集] 保育現場で気になるコトバ考

「夢中」って何だ？

[実践研究] 私の保育ノート

保育園の砂 ーある日の去り際にー

[子ども学探訪] 昔むかしのキンダーブック

子どもと共に見つめる

秋 2015

since 1901

第114巻 第4号 日本幼稚園協会

これからの保育に！
毎日コツコツ役立つ

保育のコツ 50

「保育内容」「連携」「行事」「ニーズ対応」「指導計画」
等々、現場に必須のテーマを取り上げ、基本的な考
え方、実施の仕方などのコツをまとめました。新制度を
迎え、これからの保育を考える際にぜひ！

無藤 隆 / 著 21×15cm 120 ページ 定価本体 1,380 円＋税
ISBN978-4-577-81387-4



109-50

健康

身体運動の進め方

園でせ日々運動できる環境を整えて
体を動かすことが好きになるようにしましょう。

全身

手や足だけに限らず、
体全体を動かします。

エネルギー

その年齢にふさわしい運動量をどの
子どもにも確保します。

諸部位

関節を中心に柔軟
に回転し動くように
します。

環境

いろいろな運動を
誘発する道具や設
定や施設を提供し
ます。

毎日

毎日、子どもが体
を動かすことを楽し
めるようにします。

【解説】

最近では運動不足の子どもも多く、それが運動嫌いや運動が不向き、将来的に成人病などにつながる可能性があります。その運動量は始めて個人差が大きくて、よく運動する子どももいれば、ほとんどしていない子どももいます。園での子どもの運動する機会を増やし、習慣化させる必要があります。●により大きなは運動の楽しさを覚えることです。寒い時期に裸足で体を動かすことです。それには運動の時間をつくることに、ちょっとした時に体を動かせるようにすることが大切です。●その運動は走り回ることや鉄棒をすることだけでなく、手先を動かすことやつま先立ちすることも含まれます。同じ遊んでも、まっすぐかたで走るのしつづけて遊ぶのも必要です。道具や遊具を使うと、運動の幅広がります。●特定のスポーツが上手になるより、体のどの部分にも柔軟に動くようにすることが中心です。それは様々な遊びや生活のなかで自然と体を動かすことから育ちます。

第1章 保育内容 健康 9

コツを
ぎゅっと
凝縮した
キーワード

基本的な
考え方・
実践のコツ

遊みのなかでいろいろな動きを経験

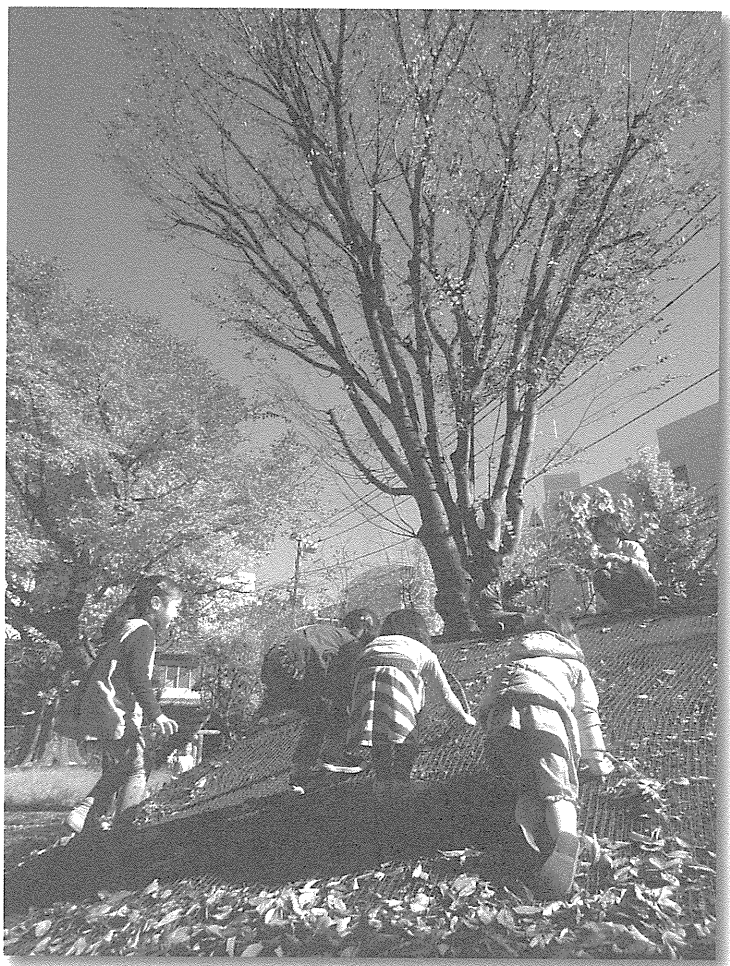
保育者から「この園は体操教室の先生が来て運動する時間がないけれど、運動量が足りないのでは？」と言われました。「そういえばうちの園は、体操教室がないけれど……私と一緒に心配になり、先業に聞いてみるとこんなふうにお返事をいただきました。園庭の登山を食ったりしてはどうでしょうか？ 虫ごっこをしたり……。体操教室の先生がいないとは言えないのではないかしら？ 待ち時間が多いより、もう少し……」

そう言われた子どもたちの動きを様々な動きをさせます。保育者は、きかけを準備すればいいのですか？

日常生活の中でありがちな出来事を新人保育者の日記風に紹介。コツを理解するヒントに。



コツを詳しく解説



「よいしょ、こらしょ」

「あとちよっとだよ」

子どもの情景

写真

子どもの情景 1

目次 まと

夢かうつつか 2

特集

保育現場で気になるコトバ考 7

「夢中」って何だ? 4

《view 視野》

子どもが夢中で遊ぶ時 星三和子 5

《視点》

子どもはみんな「夢中」になる 下田浩太郎 9

「夢中」であることーフロア理論の観点から 谷木龍男 13

「遊び」という過程ー夢中になって遊ぶ日々 野口隆子 19

《特集 memo》 23

シリーズ

子どもが育つ場所から

新園舎で暮らす二つの幼稚園を訪ねて 高橋陽子 24

実践研究

私の保育ノート

保育園の砂ーある日の去り際にー 西隆太郎 30

育休日誌

母になるということその3 郡司明子 34

保育エッセイ

子どもは豊かな遊びの世界を生きている ③

遊んで育つコミュニケーションケアの心 河邊貴子 38

本棚

古典の散歩道

『竹取物語』に学ぶ死生観ー『竹取物語』の深層ー 窪寺俊之 42

目次

表紙の図柄は、お茶の水女子大学附属幼稚園内にある
スタンドグラスの模様をデザイン化したものです。

子ども学探訪

昔むかしのキンダーブック ③

子どもと共に見つめる 灰谷知子 48

幼児の教育アーカイブズとの対話 ②

画像にみる「幼児の生活」(2)

― 園庭で育まれる物語へのまなざし

(昭和七年) ― 浜口順子 54

講演

高橋清賀子氏・太戸美也子氏

「幼稚園草創期の保育者に学ぶ

― 初代保母 豊田美雄の挑戦」(1)

構成／安治陽子

56

子どもの心

イベント・メディア情報・

読者投稿・編集後記 他 63

まど

夢かうつつか

夢かうつつか、うつつか夢か。今号の特集ワ
ド「夢中」は夢の中と書く。うつつ(現)を抜か
す」とは何かに夢中になって正気が失われたよう
になる様子らしい。しかし、子どもが夢中で遊ぶ
時、間違いない子どもは「正気」だ。それどころ
か、「夢中」で遊ぶ子どもは、「夢」と「うつつ」
の間を、想像力や好奇心を介して軽やかに往来し、
世界を自らの手で探究し、つかもつとしているよ
うに見える。

それに比べて大人は、「うつつ」の世界だけが
正しいと思ひ込み、「夢」は一時的で無益なもの
と考えがちである。寝て見る夢もしかり、子ども
の頃に抱いたヒーローへの憧れもそうだ。

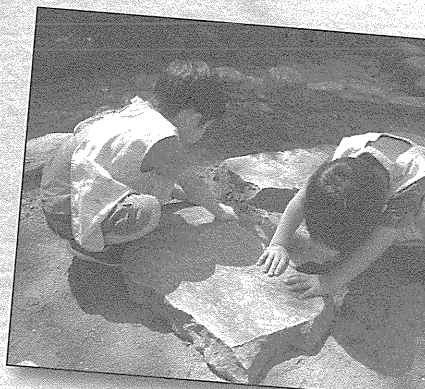
昭和十六年から六十年間、幼稚園教諭を務めら
れた堀合文子先生は、「保育者の心と子どもさんの
心とのぶつかり合い」である教育の場で、保育者
が「無」になることが重要であると、よく話した
り書いたりされていた。堀合先生の晩年、ご講演
を拝聴する機会があり、その折も「あ、また『無』
のお話だな」と耳を傾けていた。すると先生は何
か違和感を覚えたか、急に「むになる」の「む」
は「夢」のことよ、と言われた。今も思い出し
ては、その意味を考えていることがある。(五)

特集

保育現場で**気**になるコトバ考フ

「夢中」って何だ？

子どもが夢中になる姿。一心に何かに取り組んだり、ザーッと降りだした雨に心奪われたり、汗だくになって走り回ったり、友達と一生懸命に競い合ったり……。そんな子どもの姿に、保育者は、子どもの大切な瞬間を見とる。保育の中の夢中とは？「遊び」すなわち夢中なのか？「夢中」とは何か、考えてみよう。



view

視野

子どもが夢中で遊ぶ時

星三和子

(発達研究者)

「夢中になっている」とは、どんな状態だろうか。まず、大人の場合で考えてみよう。何かの活動に強い意欲をもって集中し、全力でエネルギーを注ぎ込んでいる、そんなイメージが一般的だろう。ただし、「夢中」から素晴らしい作品を創り出す芸術家もいるものの、たいいていの人は「ほどほど」という条件が付く。現実を忘れて夢中になるのは危険とみなされる。

子どもの「夢中」と保育者の評価

子どもの「夢中」の状態も大人と大差はない。幼稚園や保育園の生活の中で、例えば、園庭で友達とボールを全速力で追いかけている時。例えば、ブロックを倒れないように注意しながら高く積み上げている時。保育者の「○○ちゃん、夢中で遊んでるね」という発言は、たいていは褒め言葉だろう。なぜか。それは、夢中でいる子どもの内側で、集中力、意欲、自主性、探求心が発揮され、その結果、知識や学習方法が獲得され、自己充足感が得られ、これらすべてが子どもの全人的な発達に寄与するからである。

星三和子（ほしみわこ）

名古屋芸術大学名誉教授。専門は発達心理学。保育を子どもの発達の側面から見ているうちに、ヨーロッパ諸国の保育に関心が広がっている。

自分の世界に入り込んで現実を逃避する。危険な「夢中」の子がいないわけではない。しかし多くの保育者にとつて、「夢中」が気になる時はもつと日常的にある。例えば、ある子どもが砂場で夢中でトンネル掘りをしていて、「お昼ですよ」という先生の声も耳に入らない時。保育者は、夢中はほどほどに、保育者の声を聞いて遊びをやめるのを期待するだろう。つまり、大人の都合に従って、「半分ほどの夢の中」を求めることが多いのではなからうか。

あるいは、「コミュニケーション力」が過大評価される今日では、幼児も、友達と一緒に遊べること、集団に協調できることが称賛される。友達と一緒に夢中で遊ぶ子どもは高く評価されるが、一人遊びに夢中で友達が目に入らない子どもは否定的に受け取られがちである。つまり、個人の内側の強い集中と周囲の人との関係は、しばしば相いれない。保育の場では、そこに何らかの妥協点を見いださねばならないのである。

ピストイア市の保育で考えたこと

子どもが夢中で遊ぶ場面を見て、考えさせられたことがある。

私は八年来、イタリアのピストイア市の幼児学校（三〜六歳）および保育園（〇〜三歳）の観察を行ってきた。観察を始めた最初の頃、私は、子どもたちは遊びを楽しんでいるのだろうか？ と疑問に思った。大声で笑ったり、友達とふざけ合ったり、はしゃいだり、走ったり、という日本の子どもたちに比べて、何と静かなのだろう。ピストイア市の保育ではリサイクル品や筒のような素材を遊びに多用しているのだが、それが子どもたちには楽しくないのではないか、と思った。しかし、彼らの目は生き生きしているし、長時間遊んでいる。

何年かたって、楽しいということは興奮することだけではないと気付いた。むしろ、遊びに没頭している時の子どもは静かであり、深く楽しんでる時には笑わないのだ、と思えてきた。

例を挙げよう。ぬいぐるみを抱えた二歳児が、筒や梱包材料等の置いてある机にやって来た。三〜四本の金属性の工専用コイルを組み合わせて、大きいコイルの中に小さいコイルを通そうとしたり、重ねたり、抜いたり、引つ掛かったコイルから形を作ったりと、いろいろ試した。なかなかうまくいかないこともあれば、うまくいくこともある。いつの間にか、ぬいぐるみは脇にやられていた。十分以上遊んだ後、少しほほ笑んで、「おしまい」とばかりに両手でコイルを押しやり、ぬいぐるみをつかんで、その場を離れた。それは、十分遊んでこれよし、といった「潔さ」を感じさせる終わり方だった。

同じようなことは五歳児でも観察した。男児数人が共同でブロックやチューブ等を並べて床に街を作った。一人がブロックを置くと、それに別の子が足して線路にしたり、塔を置いたり。互いに言葉を交わすこともいさかきもなく、個々の子どものイメージが継ぎ足されていった。出来上がった後、誰が言うともなく、あつという間に皆で全部を壊した。

全身全霊でエネルギーを出し尽くすという「夢中」を「動的な夢中」と名付けらるなら、それは毎日あるわけではない。一方、ある活動に没頭して自分なりに満足するという先述のような例は、いわば「静的な夢中」である。これは毎日の生活にも起こり得ることであり、保育者がこのような子どもの姿を見逃さないことも重要と思われる。

夢中になれるための保育環境

子どもが保育の中で夢中になれるためには、環境条件が要る。ピストイア市の子どもたちに与えられている次の環境は、日本でも十分考慮できる条件だと思われる。

・長く自由な遊び時間…午前九時半ごろの朝の会が終わってから昼食の十二時ごろまで、子どもたちは、一つの遊び場面で、たっぷり自由に遊ぶ。活動が時間でぶつ切りにされない。保育者は基本的には遊びを主導することはなく、子どもの主体性に任せる。

・落ち着いて美的な保育室…保育室は、子どもが安心して落ち着け、心地よく過ごせることが何よりも配慮されている。壁面はブルーや白あるいはパステルカラーの落ち着いた色。美的な配色と物の配置には、ごたごた感がない。また、音も静かで、スピーカーを通した音楽はなく、保育者の声も小さい。情緒の安定が確保されてこそ意欲も知的好奇心も喚起されるといえるが、環境に具現化されている。

・小グループ活動…クラスは五〜十人の小グループに分かれて活動する。保育者も各グループに一人。このこじんまりさが、子どもたちの友達とのやりとりにも、一人の活動でも、心の安定にはちょうどよい。

子どもが夢中になっている時は、子どもの内側の深いところで熱い動きがある。それは子ども同士の関係や活発な活動といった、外側から明白に見える行動にだけ目を向けてはわからないことである。内側の見えない動きをわずかにうかがわせる表情や身振りからキャッチする保育者の感受性が問われることでもある。

視点1

子どもはみんな「夢中」になる

下田浩太郎

(保育士)

「夢中」と辞書で引いてみる。①夢を見ている間。夢の中。②自覚を失うこと。我を忘れること。③物事に熱中して我を忘れること。「子ども 夢中」と自分の頭の中で辞書を引いてみる。瞳を輝かせる子どもの姿が浮かぶ。そうして見つめるモノの一つに「虫」があった。

悲劇のダンゴムシと職人技

園庭の植木鉢をひっくり返すと、慌てたようにダンゴムシたちがモゾモゾと動きだす。「あー あー」とうれしそうな声を上げて、

一歳児たちがおもむろに手を伸ばす。寝ぼけて逃げ遅れたダンゴムシは子どもたちの餌食となる。ようやく動かせるようになった指先で一生懸命につまもうとするがうまくいかず、それでもあきらめずに何度も挑戦する子どもたち。今、この瞬間の子どもたちの頭の中はダンゴムシ以外ないのだろうと思われる。

ようやく「あー(捕れた)！」と感嘆の声を上げる子どもたちの手の中のダンゴムシは瀕死の状態である。「あーあ、かわいそうに」と言いたい気持ちを抑えつつ、「ダンゴムシさん捕まえられたね」と声を掛けると、満足げな表

下田浩太郎 (しもだこうたろう)
ひらお保育園保育士。都内でも自然豊かな環境の保育園で、笑い声が響き合う保育を目指して実践してきている。全国幼年教育研究協議会集団づくり部会に所属。本稿は前勤務園でのエピソードによるものである。

情で、動かなくなったダンゴムシを捨て、次の獲物を夢中で捕まえ始める。

これが五歳児となるとどうだろう。姿は一変する。ダンゴムシなどは余裕で捕まえ、砂場のカップいっぱいウジャウジャと詰め込んで、自慢げに見せにきてくれる。

散歩に出ても行く先々で生き物を捕まえ、「飼う」という発想が生まれる。川遊びに行った際にも、着くなり石をひっくり返し、虫や魚などを探し始める。「これアブラハヤだ。うちにも一匹いる」「これはタイコウチ、これはヤゴ。トンボになるんだよ！」などと得意げに捕まえてはケースに入れて持ち帰る。

お世話も慣れたもので、水槽の掃除ひとつとっても手つきが違う。「砂は一回洗って、グルグルやって、水を捨てて、きれいになってから入れるんだよ」と、砂利を少量ずつに分けてバケツに入れ、中に埋まってしまったカワニナを救出しつつ、米をとぐように慣れた

手つきで洗っていく。その間にもう一人が水槽をスポンジで洗う。「何だ、この職人集団は！」と思わず言いたくなるような手つきと連携。普段は保育者の話も上の空……子どももただが、好きなことをやっている時の集中力はこれほどまでに違うものか！と思わせてくれる。

ガキ大将といたずらっ子たち

楽しいことを夢中でやっている時の集中力は、保育者も一緒である。散歩の帰り道に見事なオオカマキリを見つけた瞬間、いたずら心がうずきだす。そこで子どもたちに相談。「ねえ、オオカマキリ持って、日先生（男性保育士）に付けに行かない？」と、保育者としてあるまじき提案。日先生は、カマキリはおろか小さな虫すら苦手なのだ。答えはもちろん、「いいねえ！……できた子どもたちである。」

そうして次々にオオカマキリを見つけて両手に持ち、そそくさと園に帰る。皆、顔はニヤついている。目的を共有する独特の一体感が心地よい。いや、冷静に見ていた子たちもいたかもしれないが、記憶にないということ、その時の保育者の視野には入っていないかっただろう。年長児を引き連れ、H先生がいる年中組に向かういたずらガキ大将といたずらっ子たち。

そんなニヤついた集団の姿に、当の本人も何かを察したのか、「なにになに？」と臨戦態勢をとる。「へっへっへっ！ 行けー！」の掛け声で、後ろに隠していたオオカマキリを差し出し、追いかける。夢中で逃げる先生を夢中で追いかけるいたずら集団。カマキリを持っていない子も、実は自分も苦手を持っていない子も、うれしそうに一緒になって追いかける。そこには教育的な意義などない。ただただあふれ出る笑顔と笑い声広がっている（いや、

逃げる人だけは必死の形相だったかもしれない）。

そして、ホールに追い詰め万事休す。目的を達成した集団は、意気揚々とクラスへ戻っていくのだった。その日の給食時の話題がその話だったことは言うまでもない。

楽しければ「夢中」になる

子どもが虫に手を伸ばす時、手を伸ばす理由には子どもの中にある。手指の感覚や機能を育てるために捕まえるのでもなければ、命の大切さを学ぶために捕まえるのでもない。楽しいから、触れてみたいから捕まえるのだ。触れ合っていく中で結果として飼育の仕方や生態などを学ぶことがあるかもしれない。学ばないかもしれない。命の大切さを感じることもあるかもしれない。ないかもしれない。それでいい。それは触れ合う理由ではない。触れ合わせる理由でもない。子どもは学ぶた

めに遊ぶのではなく、遊びたいから遊ぶのだ。「夢中」で遊ぶ。そこには「やらされる」ことから決して得られないものがたくさんある。「夢中」になること自体にすでに大きな意味があるのだ。

時折、「この子は集中できない」などという言葉を耳にする。いや、自分も使ってしまったのかも知れない。でも、本当に集中できない子はいるのであるか。子どもは楽しければいつまでも集中して遊んでいるし、声を掛けられても耳には入らない。続けたくて聞かえていないふりをする時さえある。きつとそうした「集中できない子」の上には「保育者・大人が集中してほしいことに」という言葉が付くのだろう。

子どもも大人も楽しければ「夢中」になる。そして一日中「夢中」になっていられる時期こそ乳幼児期であり、かけがえのない時代なのだ。だからこそ子どもが興味を持った瞬間

を、驚きや発見をした瞬間を見逃さず、寄り添い、共感し、応えていける保育者でありたい。そして、子どもが安心して「夢中」になれるものをどんどん増やしていける、そんな保育を目指していきたいと思う。

おわりに……（ガキ大将の顛末）

H先生を追いかけ回して笑い合った日の夕方、年中組の女の子二人が恥ずかしそうに、でも少し不満げにやって来た。そして、「H先生をいじめないでね」と注意された。もちろん謝ったが、H先生も愛されて保育しているのだなとうれしく思いつつ、この楽しみはやめられないと心の中で思った。反省しない保育者。でも「夢中」になれるからこそ、子どもの「夢中」を大切にできるのだと思うのである。いつまでも「夢中」になれる大人として子どもたちと共に笑い合っていたい。

視点2

「夢中」であることとフロー

谷木龍男

(大学教員)

「夢中」であることとフロー

心理学において、「夢中」であること、今ここでやっていることに没頭している状態、完全に意識を集中している状態は、フロー(flow)と呼ばれ、研究が進められています。フローには、「流れている」とか「流されている」などといった意味がありますが、感覚としては、「のっている」という言葉が最も近いように思います。

フローは、アメリカの心理学者チクセントミハイ(一九三四^{注1})が提唱した概念です。

彼は「楽しさ」や「幸せ」について関心を持ち、その研究をダンサー、ミュージシャン、外科医などさまざまな活動のエキスパートに対するインタビューから始めました。驚くべきことに、活動の内容が大きく異なるにもかかわらず、エキスパートたちは活動中の感覚を「フロー」であると表現し、非常に類似した特徴を述べたのです。

フローの特徴

フローの特徴には以下のものがあります。

① 行為と意識の融合…その場で起こっている

谷木龍男(やぎたつお)

スポーツ心理学者。博士(体育科学)、修士(学術)。筑波大学人間総合科学研究科及び放送大学文化科学研究科修士。2010年より清和大学法学部専任講師。

ことすべてが自然に、自発的に生じているように感じられます。優れたピアニストが演奏中に指をどのように動かすのか考えないように、体の動きや思考が自動化され、「体が勝手に動いている」「考えなくてもわかる」といった感覚を持ちます。

②今の課題への集中…今・ここで行っている活動に注意が完全に集中しています。活動に関係のない事柄は意識から完全に閉め出されます。その結果、周囲の様子が気にならなくなったり、日々のストレッチサーを一時的に忘れてたりすることができます。

③コントロール感…自分が行っていることを自分でコントロールしているし、これからもコントロールできるという感覚を持ちます。これは、実際にコントロールしているかどうかではなく、あくまで主観的なものです。

④自己意識の消失…自己意識とは、自分自身

に意識を向けることを意味しますが、フロアにおいては、この自己意識が消失します。その結果、他の人から自分がどのように見られているか、評価されているかなどがまったく気にならなくなります。

⑤時間感覚の変容…時間の流れ方が通常とは異なって感じられます。多くの場合、フロアにおいては時間の流れが速くなったように感じられ、「あつという間に過ぎた」というような感覚を持ちます。しかし、野球選手が「ボールが止まって見えた」と述べたという逸話があるように、時間が遅く流れていると感じることもあります。

⑥自己目的的体验…フロアの感覚があまりにも素晴らしいために、お金や褒められることなどの、活動の外部から得られる報酬のため(だけ)ではなく、活動においてフロアを体験すること自体が報酬であり目的となります。簡単に言えば、「楽しかった」「面

白かった」といった感覚です。

フロアの条件

このようなフロアがなぜ、どのように生じるのかについて、チクセントミハイはさらに研究を進め、フロアが生じる活動や状況には一定の特徴・条件があることを明らかにしました。明らかとなったフロアの条件には以下のものがあります。

①明確な目標…フロアが生じる活動には明確な目標があります。何を行えばよいのか、行うべきなのかはつきりと示されています。例えば、スポーツではルールが定められ、選手たちはそのルールにのっとりプレーをします。明確な目標があることによつて、何を行うべきなのか迷うことなく、意識を集中し、活動に没頭することが可能となります。目標はあらかじめ設定されることもありますが、ジャズのフリーセツ

ションのように、活動を行っていくうちに自然と生じてくることもあります。

②明白なフィードバック…目標がどの程度達成できているのかについてのしつかりとした情報（フィードバック）が活動から提供されています。ミュージシャンが常人にはわからない音色の違いを識別するように、自分の身体感覚を研ぎ澄ませたり、活動に精通したりすることによつてフィードバックを明確にすることもできますし、テレビゲームのスコア表示、音や光、振動などのエフェクトのように、活動からのフィードバックを強調、増加させることもできます。

③挑戦とスキルのバランス…課題の難易度（挑戦）と、それを達成するために必要なスキルや能力が高いレベルで釣り合っている時にフロアは生じます。チクセントミハイはこの条件をフロアの生起に最も重要なものと述べ、幾つかモデルも提唱しています。

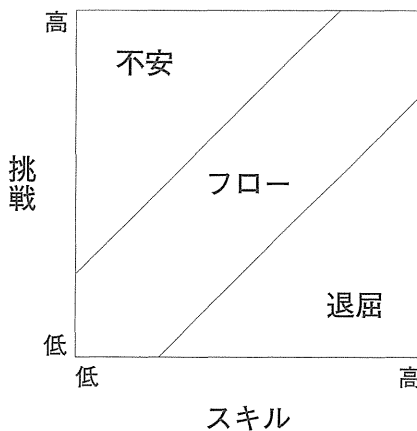
フローモデル

チクセントミハイらは、フローは挑戦とスキルにバランスが取れている時に生じるというアイデアを拡張して、挑戦とスキルの組み合わせによって、人の心理状態、主観的体験を記述するモデル、フローモデルを考案しました。

図1は、最初に提出されたフローモデルを示したものです。^{注2}このモデルは、挑戦とスキルが釣り合っている時にフローが生じ、挑戦がスキルを上回っている時には不安が、下回っている時には退屈が生じることを示しています。

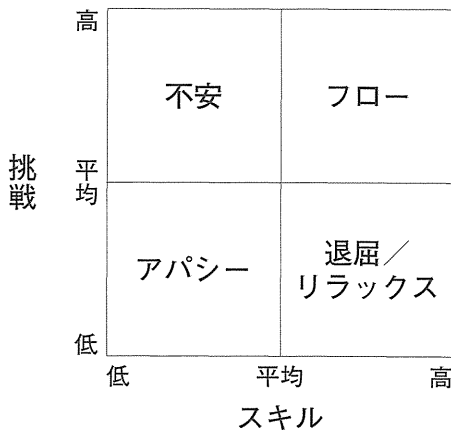
何か新しい活動を始めた時には低いスキルと挑戦のレベルでバランスが取れるためフローが体験されますが、スキルが上達するにつれて同じ課題では退屈を感じるようになります。その時、人は挑戦を上げて、再びフロー

を体験しようとします。逆に、挑戦を上げ過ぎれば不安を感じるため、スキルを上げたり、挑戦を下げたりすることでフローに戻ろうとします。結果として、人はフローを味わい続けるために、スキルと挑戦を高めていくことになります。



▲図1 フローモデル
(Csikszentmihalyi, 1990)

図2に、その後の研究の成果を踏まえて提出された4チャンネル・フローモデルを示しました。^{注3}



▲図2 4チャンネル・フローモデル
(Csikszentmihalyi & Csikszentmihalyi, 1988)

このモデルでは、挑戦とスキルの程度を個人的・主観的なものととらえ、挑戦とスキルのバランスが高いレベル（平均以上）で取れた時のみ、フローが生じるとしています。挑戦とスキルが低いレベル（平均以下）で釣り合った時にはアパシー（無関心）、挑戦がスキルよりも高い場合には不安が、挑戦がスキルよりも低い場合には退屈／リラックスが生じます。

フローと発達

フローは主観的感覚であるために、言語能力や内省の発達過程にある幼児期や学童期の子どもを対象とした研究はあまり行われていませんが、幾つかの研究はフローと発達について検討しています。そこでは、ある活動においてフローを体験した子どもは、その活動に必要なスキルや能力を身につけていくと同時に、その活動を好きになることが示されています。またフロー理論を中学校に適用する試みも行われ一定の成果を挙げたことが報告されています。^{注4}

また、フローは、環境（挑戦）と個人（スキル）の相互作用によって生じるために、環境を調整するだけでも、フローを体験することは可能です。あるいはフローを体験することを目的とすることもできます。しかし、「楽しい体育」という「楽しさ」を重視したスポ

「ツ」施策は、子どもの体力や運動能力の低下などの問題が生じ、失敗に終わったともいわれています。また、チクセントミハイは、環境を調整するだけで得られるフローは、個人の成長にはつながらず、結果的に個人の主体性を奪ってしまうと警告しています。ところかまわず、昼夜を問わず、テレビゲームに夢中になっている子どもの姿が思い浮かぶ方も多いのではないのでしょうか。したがって、教育現場にフロー理論を応用する場合には、教育的・発達の観点から子どものスキルを伸ばし、主体性を育むように、適切に環境を整備し、援助することが重要となるでしょう。

幼児が「夢中」になることの重要性はすでに多くの先生方が認識され、日々の教育に生かされていることと思います。「夢中」をフローおよびフロー理論の枠組みからとらえることで、取り組みや工夫を共有し、さらなる発展につなげやすくなるのではと考えています。

本稿がその一助になれば幸いです。

引用・参考文献

- 1 M. チクセントミハイ／今村浩明（訳）『楽みの社会学』新思索社 二〇〇一年
(Csikszentmihalyi, M. (1975) *Beyond boredom and anxiety*. Jossey-Bass)
- 2 M. チクセントミハイ／今村浩明（訳）『フロー体験 喜びの現象学』世界思想社 一九九六年
(Csikszentmihalyi, M. (1990) *Flow: The psychology of optimal experience*. Hopper Collins.)
- 3 Csikszentmihalyi, M. & Csikszentmihalyi, I.S. (1988) *Optimal experience: Psychological studies of flow in consciousness*. Cambridge University Press.
- 4 浅川希洋志「フロー理論の概要」浅川希洋志・静岡大学教育学部附属浜松中学校『フロー理論にもとづく「学びひたる」授業の創造』第一部第2章 学文社 二〇一一年 pp. 6-16

視点3

「遊び」という過程へ夢中になって遊ぶ日々へ

野口隆子

(大学教員)

子どもの「遊び」その言葉からどのようなイメージを思い浮かべるでしょうか。子どもが「遊んでいる」という状態、その経験を保育者はどのように見つめ、かかわっているのでしょうか。

子どもが夢中になり没頭・集中して遊ぶ姿はどのようにして育まれるのか、ルーベン大学のラーバース教授らによって開発された、SICS (A Process-oriented Self-evaluation Instrument for Care Settings) ^{注1}に関する研究を参照してみたいと思います。

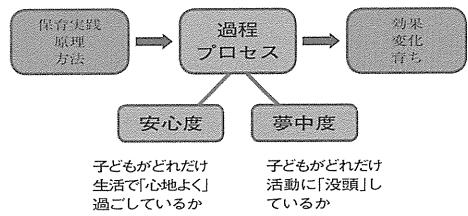
SICSは子どもの「今、ここ」をとらえ

る視点として「安心・安定 (Well-being)」と「夢中・没頭 (Involvement)」の二視点を共通軸に据え、子どもの経験がどのような質のものであるかに着目します(次ページ図参照)。

その根幹となる思想は、経験に基づく教育 (Experiential Education) にあります。保育・教育の質を結果から見るのではなく、結果に至るまでの文脈過程をより重視し、その際、子どもが情緒的に安定して心地よく過ごし、生き生きと喜びをもって過ごしているかという「安心・安定」の視点と、活動に没頭し、意欲をもって取り組んでいるかという「夢中

野口隆子 (のぐちたかこ)

十文字学園女子大学人間生活学部幼児教育学科准教授。
現在、幼児期・児童期の発達と保育の質の関連性や園内
研修の方法について、共同で研究を行っています。



▲図 保育・教育における質
 (「保育プロセスの質」研究プロジェクト
 (2010、2011) に一部加筆)

・没頭」の視点
 を置き、各々の
 程度について、
 特定の基準を基
 に評価を行いま
 す。子どもが夢
 中になって活動
 し、遊ぶ姿と、
 生活の中で心地
 よく過ごし、安
 心・安定する姿

とは表裏一体であると考えられます。

「保育プロセスの質」研究プロジェクト(2010)では、日本の保育文化の中でS I C Sがどのように位置付けられ研修等で利用が可能かを検討しました。その際、^{注2)} 評定するだけでは意味がなく、なぜその評定をつけたのか、他の保育者と理由や根拠を語り合い、相互の相違点に気付いていくことが保育を開き、学び合

う鍵となるということがわかりました。

S I C Sには幾つかのフォームシートがありますが、できなかったことなどマイナス面だけでなく、明日のより良い保育に向けて、現状で優れているところや具体的に改善したい点など保育のプラス面を見ていく手順や、環境面・子どもの主体性の発揮・保育者のかかわりや援助・クラスや集団の人間関係や雰囲気・園やクラスの運営面という五つの側面から園全体の取り組みとして検討していくという手順が設けられています。日本版S I C Sを使った研修をきっかけに、それぞれの園の子どもの姿のイメージとして「夢中・没頭」の程度が高いとはどういうことなのか、質の高い豊かな遊びとは何かを考える創意工夫、独自の深まりを示した事例が見られました。^{注3)} 「保育プロセスの質」研究プロジェクト(佐々木 2011)。

実際に研修で参加者に評定をしてもらうと、

同じ場面を見ても「安心・安定」や「夢中・没頭」の程度が全く違っていることがあり、驚きの声が上がります。保育経験や勤務形態、専門性などの違いにかかわらず、参加者が共通軸を基に子どもの表情や動きのとらえ、行動の解釈を語り合う場となります。子どもの今、ここ、がさらに次の、そして明日へとつながっていく、その過程を園全体で探るためのツールの一つだと言えるでしょう。^{注4}

子どもが夢中になる姿は、周囲を巻き込む魅力と可能性を秘めています。園で出会ったある事例を紹介してみたいと思います。

六月のある日、園外散策で捕まえたザリガニを子どもたちが見ていました。非常に元気のいいザリガニばかりで、触ろうとしても素早い動きで逃げ、手を近づけるとはさみを振り上げて威嚇します。子どもたちはきゃあと声を上げながら、夢中で捕まえようとしてい

ました。逃げられても挟まれても、あきらめずにザリガニに向かい、「見て！」とザリガニをつかんで一緒にポーズをとっています。

そうした周囲を見つつ、一人の女児が「怖い、怖い」と言い続けながら何とかつかもうとします。周りの子どもから「こうやるんだよ」と言われ、先生もその女児の傍にいて声を掛けつつ、しかし先生自身、動きの素早いザリガニを捕まえるのに苦心し、挟まれるたび「痛い！ 痛い！」と言いながら、笑顔で子どもたちとかわっていました。女児は「怖い」と近づいたり離れたりして、ザリガニ、先生、周囲の子どもを見つめます。はさみで挟まれて痛かったせいか途中であきらめ、ケースを斜めにして、浮いている餌をザリガニにつかませようとしていました。

だんだんと周囲の子どもたちがいなくなり始めた頃、意を決したような表情になり、先生がつかんでいる様子をよく見て、ついにザリガニをつかみ、「先生、早く！」と声を上げ、「すごいね！」という保育者の応答に、すぐにザリガニを離しました。

子どもたちは夢中で生き生きとした表情を見せて、全身で楽しんでいました。横で見守っていた園長先生は、今、ここ、では言葉を掛けなかつたけれど、ザリガニは本当に面白い形をしているので、そこにもいつか気付いてほしい、という思いも持っていたそうです。

日々の保育の中のさまざまな場面において、子どもたち一人ひとりに探究や挑戦の機会があります。しかし、その子どもの経験をとらえ次を考える視点は複層的であると思われ^{注5}ます。子どもにとって意味ある経験が園生活の中でどのように創り出されていくか、あらためて考えていく必要があるのではないか、私も研究していきたいと思えます。

引用・参考文献

- 1 Laevers, F. (2003) Making care and education more effective through well-being and involvement. Laevers, F. & Heylen (eds.) *Involvement of Children and Teacher Style.*

Insights from an International Study on

Experiential Education, pp. 13-24. Lueven

University Press.

- 2 「保育プロセスの質」研究プロジェクト『子どもの経験から振り返る保育プロセス—明日のより良い保育のために—』幼児教育映像制作委員会事務局 二〇一〇年

- 3 「保育プロセスの質」研究プロジェクト『子どもの経験から振り返る保育プロセス—明日のより良い保育のために—実践事例集』

H22年度児童関連サービズ調査研究等事業報告書成果物 財団法人こども未来財団 二〇一一年

- 4 野口隆子『『子どもの経験を捉える視点』を養うために』発達126 Vol.32 pp. 18-24

ミネルヴァ書房 二〇一一年

- 5 野口隆子「幼児期の挑戦的意欲を育む」日本教材文化研究財団研究紀要 No.44 pp. 83-87
公益財団法人日本教材文化研究財団
二〇一五年



幼児教育の世界で、子どもが「夢中」になることは、ほぼ無条件に「良い」ととされている。しかし、『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』また『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の本文の中に「夢中」という言葉が使われており、子どもの「遊ぶ」姿とセットで使用される点は共通だ。その中で、幼稚園と認定こども園の要領解説では、遊びの本質論の中で「夢中」の語が見える。つまり、「遊びの本質は、人が周囲の事物や他の人たちとつながるがままに多様な仕方で応答し合うことに夢中になり、時の経つのも忘れ、そのかわり合いそのものを楽しむことにある。」（傍線筆者）と、同じ文言で語られている。

一方で、幼稚園および幼保連携型認定こども園において、夢中で遊ぶことは確かに重視されているが、幼児期にふさわしい「無理のない一日の流れをつくり出す」中で、その「無理」を考慮する際の視点ともなっている。園児が「夢中」になって遊びに取り組んでいる場合には、教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動においても幼児は同じ活動をやってみたいと思うこともある。教育課程に基づく活動を考慮するということは、必ずしも活動を連続させることではない（『幼稚園教育要領解説』より。幼保連携型認定こども園教育・保育要領の解説では、一時預かり事業との関係で論じられる）とされる。『保育所保育指針解説書』ではもとより「一日の生活の流れ」が前提とされており、教育時間の前と後を無理なくつなぐ必要性について特に問題とされない。（H）

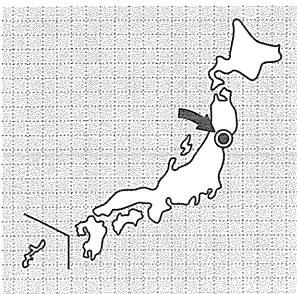
シリーズ
子どもが育つ
場所から

新園舎で暮らす二つの幼稚園を訪ねて



▲唐桑幼稚園

▼大谷幼稚園



おおよ
大谷幼稚園・唐桑幼稚園（宮城県気仙沼市）

東日本大震災から四年。震災の影響は形をいろいろに変えて表れていることですが、新園舎は明るい光で子どもたちや地域を温かく照らしているように感じました。その中で暮らしがぶりや交流の様子をお届けいたします。



今号のレポーター
お茶の水女子大学附属幼稚園
伊集院、上坂元、渡邊、高橋（文責）の4人で訪問しました。
昨年度に続いての訪問を快く迎えてくださり、子どもたちとの交流も楽しみました。

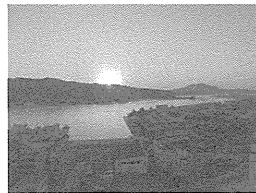
気仙沼市を訪ねて

大学のプロジェクトの一環で、昨年度に続き気仙沼市の幼稚園を訪問することになった。前日、担任していた年長組の子どもたちにそのことを伝え、私たちの園の遊びや生活を紹介するポスター（教師が写真を貼り、そこに子どもたちが言葉や絵を添える）を十数人と書いた。降園前の集まりで、完成したポスターをクラスのみんなに見せると、「どんな誕生会なのか聞いてきてね」「チャボを飼っていることを言ってきてね」などの言葉が聞かれた。遠い地の幼稚園に思いをはせ、知りたい、つながりたいと思う子どもたちの気持ちを受け、ポスターと言葉のメッセージを持って二つの幼稚園を訪ねることになった。

保育を終えた私たち四人は、東京駅に向かった。東北新幹線に乗って二時間、一ノ関で大船渡線に乗り換えてさらに一時間半、気仙

沼駅に到着した。そこからタクシーで約十分の所にある高台の宿に向かい、翌日の大谷幼稚園と唐桑幼稚園訪問に備えた。翌朝、気仙沼湾の向こう側に昇る朝日に照らされ、港町の町並みを見渡すことができた。震災から四年の歳月に思いを巡らせながら、この日出会う子どもたちや先生方との交流に期待が高まった。

*お茶の水女子大学と気仙沼市教育委員会との共同研究



▲気仙沼湾の日の出

大谷幼稚園

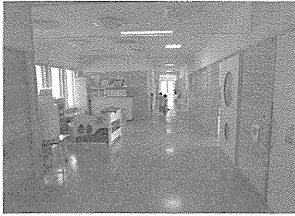
大谷幼稚園は、先の東日本大震災で津波の被害を受け、建物内に土砂海水が入り込む甚大な被害を受けた幼稚園である。先生方はじめ地域の方々と、保育を早く再開しようと片付けに尽力されたが、「幼児にとつて安全は最優先」という教育委員会の決定により、小

中学校と一緒だった元の場所よりも高い土地に新園舎を建てることになったそうである。

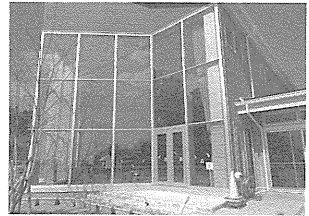
平成二五年九月に、間借りしていた小学校から新園舎に移転した。

外観も室内もとてもきれいで、窓が大きく取られ、木の床、壁は薄い色合いで明るいイメージだった。園長の齋藤先生のお話によれば、安全性は確保されたが、小中学校の校舎から離れたことで、卒業生の成長を身近に追えない寂しさや、学校の養護教諭をすぐには頼れない心もとなさを感じているという。

園舎の事以外にも、園児・保護者の現状についての話を伺った。



▲広い廊下



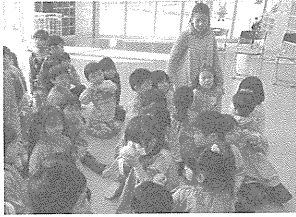
▲園舎外観（大谷幼稚園）

印象的だったのは、「四年がたち、インフラは整備されてきたが、思ったように復興が進まず、以前よりも心が落ち着かなくなっている」という話だった。卒業式を一か月後に控え、お休みがちな子どもがいるという。幼稚園側は来てほしい。親も連れていきたいと思っている。でも、力がわかず行動に移せない状況になってしまっているという。また、大谷幼稚園に限らず市内の幼稚園職員の中にも震災の影響がじわじわと大きくなってきている事実もあるという。気持ちをみんなに伝える機会を持ち、共有する、一人で抱え込まないようにしていくことが大切だと切に感じているとおっしゃっていた。

大谷幼稚園の子どもたちとの交流

園長先生のお話を伺った後、全園児が集まるホールに案内された。そこで私たちの園の子どもたちや保育の様子を直接伝えることに

なった。園庭での遊びの様子、チャボのお世話の様子、「スベシャルまつり」という年少組を楽しませる取り組みに向けての準備や当日の様子を、写真を見てもらいながら伝えた。



▲夏ミカンの匂い、よい香り

持ち、鼻を近づけて匂いをかぎ、次の人へと丁寧に渡していった。五感を働かせて初めて出会う物を丁寧に感じ取ろうとする興味関心の心持ちを確かに感じた。



▲私たちの園の様子を知らせる

その後、いよいよ私たちの園の子どもたちからの質問をさせてもらった。「何を飼っていますか？」との問いに「どじょう!」。その他にも質問していると今度は「何でおまつりをしたのですか?」「どんな誕生会をしますか?」等の質問を受けることになった。少しずつ関心が広がり、本園の子どもたちを身近に感じてくれたよううれしく思った。

子どもたちとの交流後、私たちが園舎内を見学していると、早速夏ミカンを少しずつ分けて食べたとのこと。職員の方もつながりを大事にしてくださいとうれしく思った。

園庭に出ると、サッカーや縄跳び、砂場などで思い思いに遊ぶ子どもたち。誘われて一緒に遊ぶことになった。短い時間ではあったが、子どもたちの開かれた心、夢中になって遊ぶ様子



▲園庭の様子 (大谷幼稚園)

に触れることができ、何の心配もなく穏やかな心持ちで元気に遊べる環境を整えることが大人に求められていると深く感じた。

唐桑幼稚園

唐桑幼稚園は震災で園舎が使えなくなり、唐桑小学校に間借りして二年を過ごし、その後、平成二五年六月に新園舎が完成している。坂を上り切ると、落ち着いた趣の園舎が見え、職員の方々が出迎えてくださった。園内に案内され保育室をのぞくと、昼食の片付けをしているところだった。年長児の在籍は二名とのこと。年長組の保育室には二人による手作りの紙芝居「ようちえんってどんなところ」が置いてあった。また、廊下には地域の「いいものみつけマップ」が張ってあった。紙芝居は、次にこの幼稚園に入ってくる園児たちに幼稚園の事を知らせるために作ったとのこと。そしてマップは、地域に繰り返し出掛け、



▲ようちえんってどんなところ

のポスターをもとに話をしていると、一人の男児が部屋の片隅を指差し、そこに何か大事な物があると話してくれた。私たちの園の話聞いて、自分の幼稚園の大事な事を知らせたいと思い、伝えてくれたのだろう。また、誕生会について尋ねると、「自分たちで司会して、ゲームとか考えてみん

そこで出会った自然のことや、関係性を広げたいと行っている松園幼稚園との交流について描き込まれているものだった。

食後の片付けが終わった年長児と本園



▲いいものみつけマップ

なでやる。誕生日の子の欲しいプレゼントを聞いて作ってあげる」と教えてくれた。

誕生会の持ち方や紙芝居作成の話聞き、自園の文化を継承していく大切さがきちんと子どもたちに伝わっていると感じた。

身近な地域環境とのつながり

参観後は、園長の小野寺先生と研究主任の工藤先生から、研究のお話を伺った。

新園舎になった当時、砂場でごちそうを作っても、飾りになる葉っぱなど何もなかった。そのことが一つのきっかけとなり、地域に出掛けるようになった。その後も日常生活の中に豊かな自然、地域の良さを活かした経験を、たくさん取り入れているという。最近では、牡蠣^{かき}の養殖場に行ったり、打ちばやし保存会の皆さんや小中学生から太鼓を教えていたりしたりしたことである。

地域に出掛けていくことにより、地域を知

るだけではなく、そこから得た感動を再現する力、気付いたり互いに高め合う力、温かい気持ちや優しい心の芽生え、意欲などにつながったと、まとめられていた。

四年たつて震災直後とは違う問題が出てきているという。しかし、自然豊かな環境を活かし、地域とのつながりを大事にしていく教育を実践されている職員の方々のご尽力により、子ども笑顔、元気な姿はしっかりと守られていると感じた。今後子どもたちの生活に根ざした交流を継続できたらと願っている。

— 訪問メモ —

訪問時期：2015年2月

訪問場所：気仙沼市立大谷幼稚園

〔住所〕 宮城県気仙沼市本吉町寺谷 9-2

〔電話〕 0226-44-2203

気仙沼市立唐桑幼稚園

〔住所〕 宮城県気仙沼市唐桑馬場 143-1

〔電話〕 0226-32-2299

保育園の砂——ある日の去り際に——

西 隆太郎

(大学教員)

毎週、私はA保育園を訪れ、子どもたちと

遊ぶ時間を頂いている。A保育園の先生方に、
そして子どもたちに、いつも温かく迎えてい
ただいてきた。

朝、自由遊びの時間を共に過ごした後、私
は子どもたちと別れて帰ることになる。いつ
までも手を振ってくれる子、「明日も来る？」
と尋ねてくれる子……。

子どもたちの世界では、どの去り際も、心
あるかかわりの中で生まれている。

クリスマスの日の朝、園庭で子どもたちと

遊んだ。

「サッカーしよう！」と私を誘う、三歳のK
君。そのうちに、S君やT君も加わって、途
中からはバスケットのゴールに、どこまでも
一緒にチャレンジした。

それがいつの間にか、かくれんぼになり……
トンネルの中に三人で隠れ、鬼のT君が見つ
けてくれるのを待つ時間。私たちは、いつも
と違う静かさの中で楽しみを共有した。T君
と再会したみんなが歓声を上げると、そこに
年長の女の子も加わって、トンネルはお化け
屋敷になっていった。女の子に配ってもらっ

西 隆太郎 (にしりゅうたろう)

ノートルダム清心女子大学人間生活学部児童学科准教授。

専門：保育学、臨床心理学。



▲かくれんぼのトンネルは、みんなが集まってくるうち、やがてお化け屋敷になっていった

た、見えない入場券を手に、次々にお化け屋敷を探検する。同じ一つの物も、子どもたちの心と楽しさに導かれ、どこまでも変化していく。

ちようどその近くで、仲間とはぐれてしま

つた女の子が泣いている。私の手を次々に引っ張る男の子たちに「ごめんね、ちよつと待っててね」などと言いながら、何とか彼女をなだめようとしてみたり……。

いろんなことがあった。

子どもと遊ぶ時間について、津守眞はこう語っている。

「いっしょにたのしくいることが、そこですべてである。その時間は、ずい分長い。(略)けれども、いっしょにたのしくいる時間はみじかく感ぜられる。(略)こういうときの子どもの世界には、前も後もないみたいだ。その瞬間のたのしきがあるだけのようである。(略)私は、おにごっこをしていたのではなかったのだと思う。子どもといっしょに、とにもいる世界をたのしんでいたのだと思う。」

(津守眞著『子ども学のはじまり』)。

他にどう表現することもできない。子どもと共にいる時間とその尊さを、これほど心動かす言葉で語れる人を、私は他に知らない。

お昼も近づき、そろそろ私も帰る頃合いとなった。

「そろそろ帰るね。ばいばい、また遊ぼうね」
T君は、持っていたお皿から砂をすくって、私の手のひらに乗せてくれた。

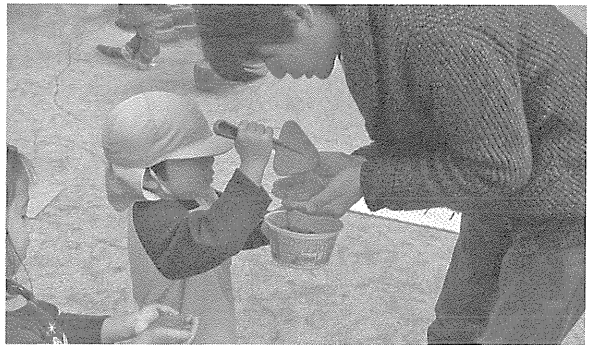
「おいしいね！ T君、ありがとう」

そうして帰るつもりだったが、何度もおかわりの砂をくれる。

「持って帰っていいよ。こぼさないでね」

「ほんと?! ありがとう。大事に持って帰るよ」

私はT君が振る舞ってくれた砂を紙に包んだ。保育園の砂だが、名残惜しく持って帰る今、どこかしら甲子園の砂のようにも思えてきた。



▲カップに砂や草を入れ、ごちそうを作ったT君。
「持って帰って」と私の手に乗せてくれた

「その中に入れたの?」

「そうだよ。ありがとう」

そして、ずっと手を振り続けながら別れた。

別れの時、私にも子どもたちの中にも、いろいろな気持ちがあ動く。去り難い気持ちもある。

り、どんな言葉を掛けて別れようか……と、さまざまに考えもする。

けれども去り際は、私と子どもたちの間で生まれるものである。私の意図だけで、子どもたちの体験をコントロールすることなど、できるはずもない。心ある去り際の体験は、むしろ子どもたちのほうから与えてくれることが多い。この日も、私が配慮してというより、T君のほうから砂のプレゼントを、そして心に残る去り際をくれたように思う。

誰にも体験があると思うが、目覚めて心に残る夢がある。とても長い夢で、どんなストーリーだったか、すべてをすぐに思い出すことはできないが、最後のシーンだけは、胸の奥の体感と共に、ずっと後を引いている。それが、その夢を象徴する「意味の感覚 (felt sense)」だったのだろう (E. T. ジェンド

リン著『夢とフォーカシング』)。

園庭で過ごした時間。その中には、何気ないけれども、しかし大切なことが、たくさんあった。どんなことも、思い出してみれば、その時の楽しさや、子どもたちにどう出会おうかといういろいろに考えたこと、心動かされたことがよみがえってくる。

最後にT君がくれた砂。それは名残惜しい夢の世界に別れて目覚めた時の体感のように、心に残っている。その日、園庭で出会った大切な体験の一つ一つが、集約されているように思える。

今そこに残されているのは少しばかりの砂であって、外から見ればただの砂にしか見えない。それでも、そこには子どもと私の夢が生きている。



母になるよりいっしょ

郡司明子
(大学教員)

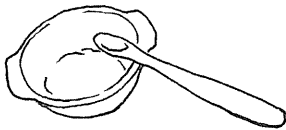
季節は巡り、春から初夏へ。Yの成長を応援するかのごとく、あちらこちらで木々の新芽がほころび、長い眠りから覚めた草花がひよこっと顔を出しています。そこにYの生命も呼応しているようです。

この間にYは生後6か月からミラクルな9か月を迎えました。ずりばいだった移動手段は、少しずつお尻が上がり、ついに、はいはいに。お座りから立つち、伝い歩きにも余裕が出て、徐々に変わりゆく視界の広がりを楽しんでいます。離乳食も始まり、手づかみで

食べることを好むようになった矢先、下の歯がちよこんと見えてきました。

215日目：離乳食開始

ここまでどれだけ夫婦で口論(けんかとも言ふ)を重ねてきたことか。Yの離乳食開始の時期をめぐり、はたまた初めてのおかゆに使うお米をめぐり、調理器具をめぐり……。



郡司明子(くんじあきこ)
群馬大学准教授。専門・美術科教育。小学校教諭を経て現職。身体性を重視したアート教育を実践研究中。

だいたい細かくてこだわりのある夫と、「まあ、いいんじゃない？」という、いい加減な私は、あらゆるところで衝突する。Yのために善かれと思う気持ちは同じだが、その尺度が異なるから、互いの了解を取りつけるまでに時間がかかる。

それで、Yの離乳食は生後7か月に入ってから。夫が気に入って取り寄せている無農薬無肥料の玄米を、この機に購入した精米機で精米し、浸水し、やれお米からコトコト土鍋で煮ること数十分、蒸らし、さらにヨーグルト状になるまで濾し、やつとの思いでできたおかゆをYの口に運んでみれば、ぺろり。離乳食初日は、この一さじだけです。

218日目：お布団プール

リビングに適度に柔らかい布団を敷き、その周りに家中の座布団やクッションを並べ、

垣根を作る。その中でゴロゴロ動いて満たされていたY。最近、垣根を難なく乗り越えていく。

232日目：身辺材と共に

家に届く段ボール箱、その荷物を覆っていた梱包材や面白い質感の包み紙、ラップの芯など、いわゆる身辺材を集め、Yの遊び場に持ち込む。薄手の色紙をひらひらと空中に舞わせれば、Yも一緒に乃て全身で応答する。時にYは、段ボール片に手を置いて、ずりずりと床を前進する。偶然にも垂れたよだれの痕跡がドリッピングアートのようだ。しげしげとそれを見つめ、右手の人さし指ですーっと伸ばす。Yが生まれて初めて描いた瞬間。



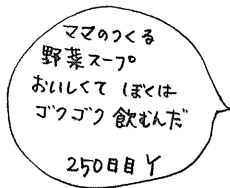
おふとんプール
から出て
テ-ブル
の下まで冒險はよ
230日目

239日目：しょうゆ作り

近所の友人に誘われて、しょうゆ作り挑戦。大きな瓶に麴と食塩水を混ぜ合わせ、もろみを作る。Yを背負ってゆつくり手を動かす喜び。仕込んだ後、一か月までは頻繁に、その後は適度にかき混ぜ、もろみを育てていく。手間暇かけて時間をかけて発酵・熟成が進む。これから変化していくもろみの色や香りを楽しんでいこう。そしてしょうゆとして出来上がる頃に、私は復職の予定。

247日目：万能スープ

離乳食もようやく軌道に乗ってきた。わが家に欠かせないのが野菜スープ。ほろろ鍋に季節の根菜類をたっぷり入れて煮込み、毎



食便利に使い回す。一部はマッシュにして冷凍に。最後はひき肉を入れて大人のミートソースにしたり、豆乳や牛乳でのぼしてリゾットにしたり。変幻自在な万能スープの可能性をさらに追究しよう。

256日目：いない いない ああ

窓際が好きなY。風を受けて気持ち良さそう。しばらくして、カーテンを体にまとった次の瞬間、ぱっと顔だけこちらに向ける。これは……、思わず私も「いない いない ばあ！」とYの動きに合わせて声を掛けてみる。きゃつきゃと笑い、掛け声のタイミングで同じことを繰り返す。子どもからのメッセージは至る所に潜んでいる。

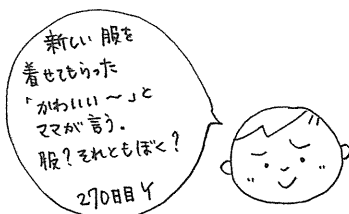
268日目：保育所へ

少しずつ仕事復帰に向けて準備を始める。まずはYの居場所が肝心だ。ご縁あって家か

ら近くの保育所で預かって
いただくことに。慣らしの
時期は週一日、しかも初日
は九十分。それでも私は一
週間前からそわそわ。何事
もなく過ごせるだろうか？
持っていく物は？ 着てい
く服は？ すべて記名でき
ている？ 書類を整え、一
つ一つの物にYの名前を書
き入れながら、ああ、親に
なっていくことを実感。

275日目：神経衰弱

はいはいで家中どこへでも行き、探索にい
そしむY。そんなYのお気に入りの場所は、
立っちでちょうど手が届く本棚。そこは文庫
や新書のコーナー。隙あらば、片っ端から取

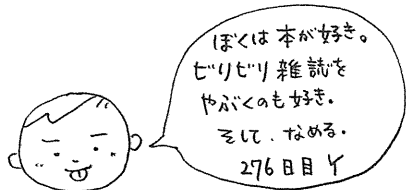


り出して、本体・カバー・帯を見事に分解し
てくれる。しばし本の海に漂うY。Yが去っ
た後に残るのは私の片付け。バラバラになった
物たちを組み合わせて元に戻す作業は、まる
で神経衰弱のよう。

278日目：母の日

みんな誰もが母親から生
まれてこの世にやって来る。
生んでくれてありがとう。
生まれてきてくれてありが
とう。命のリレーに感謝す
る日。出産を経て、ひとき
わ感慨深い日に。

— 続く —



子どもは豊かな遊びの世界を生きている③

遊びで育つ「コミュニティケアの心

河邊貴子

(大学教員)

「コミュニティケアの心

本ページの下部に記されている筆者の紹介の中に「医療と地域と子どもをつなぐNPO活動もライフワークの一つ」とあるが、今回はその活動で出会う子どもたちの話をしようと思う。

私は東京郊外にある「ケアタウン小平」という施設の子育て支援事業担当理事をしている。という子どもたちのための施設と思われるかもしれないが、一階にデイサービスセンターと訪問看護ステーションや診療所があり、二階と三階にはケアを必要とする一人暮らしの方が住んでいる。「コミュニティケアリンク東京」というNPO法人が運営している医療と福祉の複合施設である。利用者の大半がお年寄りの施設に、どうして子育て支援の機能を持たせているのか。

現在の日本では、「病人は病院へ」「高齢者は福祉施設へ」「子どもは学校へ」とそれぞれがそれぞれの施設に「囲われる」傾向が強くなっている。ほんの何十年前には地域の中で支え合って暮らしていたのに、それが難しい時代。もちろんそれぞれのニーズに応じた適切な環境の充実は必要なことだが、同時に、地域に支え合いの心を育てることも大切だろう。子どもは本来的に

河邊貴子（かわべたかこ）

聖心女子大学文学部教授。専門は幼児教育学。主な研究課題は保育記録論、遊び援助論。医療と地域と子どもをつなぐNPO活動もライフワークの一つ。

は支え合いをいとわれない存在だが、その力を発揮できる場が暮らしの中で提供されていないのが現実である。そこで、「ケアタウン小平」という場を核として、地域から失われた支え合いの機能を再生し、「コミュニティケア」の理念を広げようというのである。ここで私たちが目指しているのは、異世代間のかかわりを深め、子育てがしやすい地域づくりへの貢献と、「小さな市民」としての子どもたちに活躍の場を提供することである。具体的活動の一つに、「集まれ子ども広場」という遊びの会がある。参加年齢は小学生を中心に幼児から中高年までと他に例を見ないと思われるほどに幅広く、私たち大人も子どもと一緒に（同等に）遊ぶ。実施回数は百回を超えた。

子どもたちの遊び心

子どもが考える遊びがとにかく面白い。例えば、数年前の秋、定期的に運動会の話題が挙がり、その流れの中で、「来月はケアタウン小平でも運動会をやろうよ」「学校の運動会では絶対にできない競技をやろうよ」ということになった。内容は全部子どもが考えて準備する。

最初の競技は「マシユマロぱつくん競争」。建物の二階から下がっている植栽の先に大量のマシユマロをぶら下げて、みんなで食べるとする姿は滑稽こっけいで、見ているも面白いし、参加者は楽しくて必死になってマシユマロを食べようとする姿は滑稽こっけいで、見ているも面白いし、参加者は楽しくて仕方がない。これ考えたのは小学校五年生のユキちゃん、繰り返しの参加を通して「場」の利点を十分に感じ取っているからこそその競技だった。マシユマロに糸を通す作業は、手がベトベトになってなかなか大変なのだが、ユキちゃんたち三人の小学生は根気強く百個のマシユマロに糸を通し切った。みんなが喜ぶ姿がすっかりイメージされているから頑張れるのだろう。身長

の低い幼児のために一部は糸を長くする配慮も忘れない。

次の競技は「お鍋のふた合わせ」。家庭から持ち寄った鍋の本体をあらかじめ施設内の至る所に隠しておく。競技者はふたを持って走り回り、ぴったりの鍋を探し当てる。ここでは大人も手を抜かず遊ぶので、優勝者は六十四歳のアツコさんだった。その次は「小枝ちゃんを探せ」。小枝の形をしたチョコレート菓子をラップに包み、中庭に隠し、それをみんなで見つけて食べる。ところが、チョコだと思つて喜び勇んで開けると本物の小枝だったりするので気を抜かない。これを考へて準備したのは幼児五名である。小学生や大人が自分たちの隠したお菓子を一生懸命に探す姿をニマニマしながら見ていて、「やられたあ、これは本物の枝だ」と悔しがる姿を待ち望んでいる。遊びの会を始めた当初はそこまで気が付かなかったのだが、こんな一見ばかげた遊びに熱中する子どもの遊び心の中に、コミュニケーションの本質がすでに芽生えている。

遊び心に見られる「コミュニケーション」

第一に、いつも子どもたちは遊び仲間が最大に力を発揮できるように考えようとするのだ。小学生がマシユマロの糸を幼児用に長くするのは、その人なりの挑戦具合を判断しているからなのだ。どの程度の長さだと幼児にとってちょうどよい難しさかを考えている。鍋のふた合わせも同じ。草むらのどこに鍋を隠せば大人には見つけにくいかを考えている。

遊びというのはあまり易しくもつまらないが、難し過ぎても挑戦意欲が低下するものだ。繰り返し遊び込んでいる子どもたちは、直観でその人なりの「ちょうどよい負荷」を判断し、環境を準備しているようなのだ。もちろん、小学生はいつも幼児に思いやりをもって行動しているけ

れど、単に「いたわる」のではなく、小さな子どもなりにその子の力が発揮できるにはどうしたらよいかを考えている。みんなが楽しまなければ遊び全体が面白くならないことを知っているのだ。私は子どもたちから「さまざまな世代が共に心地よく暮らす社会のために、なくてはならない考え方」を教えられている。

第二に、思いつ切り羽目はずして「今」を楽しもうとしながら、ある種のバランスも保とうとしていること。

経験のある方は思い出してほしい。昔の子どもはワルダクミがうれしい遊びをよくやったものだ。落とし穴を掘っている時のワクワク感、誰かをそこまで誘導してくる時のドキドキ感、そしてうまくワナにはめた時の達成感。もちろん、本当に人をだますことはいけないことだが、そこにある種のユーモアと節度を保持することによって、この手の遊びは結果として笑いに包まれ、人間関係がより深まるのだった。そして時にやり過ぎて失敗することもあり、「悪質なふざけ」と「遊びの喜び」の違いを判断できるようになっていったのではないか。

今の子どもたちは規制と禁止に囲まれていて、思いつ切り楽しむ方法を考えながら遊ぶ機会を奪われている。これでは、ある種の秩序や調和がないと実は遊びは面白くならないことに気付けないのではないか。本物の小枝をチョコレートにまぜておいた幼児たちは、ユーモアと節度が人と人を結び付け、人生を楽しくすることを知る第一歩を踏み出したのだと思う。

今回の遊びのテーマは「焼き芋」。実際に芋を焼くのではなくビニール袋をかぶって落ち葉をかけてもらい「お芋の気持ち」になってみるのだという。大人の私でさえ、今からワクワクするな。



新・講談社の絵本『かぐや姫』
織田観潮 絵（講談社 2001年）

『竹取物語』に学ぶ死生観 —『竹取物語』の深層—

評者

窪寺俊之
(大学教員)

「かぐや姫」として親しまれてきた『竹取物語』は、子どもの心を浮き立たせた絵本の一つです。竹の中から生まれたかぐや姫は、子どもの心を夢の国へと誘うには十分でした。誰でも一度は読んだことがありでしょう。このファンタジックな世界が子どもたちの心を豊かに養ってきたことは間違いありません。私も三歳か四歳の時、母に読んでもらった記憶があります。小学校の図書館にも、子ども向けの本に『竹取物語』がありました。恥ずかしいことに、この古典が平安時代の高貴な身分の女性たちのために書かれたとは知りませんでした（知ったのは、高等学校の古典の時間です）。日本最初のひらがな文学の物語として誕生しました。

物語の構成

この物語には三つの山場があります。一つ目は竹の中から小さな女の子が生まれたとこ

窪寺俊之（くぼでらとしゆき）
聖学院大学教授。1939年生まれ。専門：スピリチュアルケア学。著書：『スピリチュアルケア入門』（三輪書店）、『スピリチュアルケア学序説』（三輪書店）、『スピリチュアルケア学概説』（関西学院大学論文叢書）。

ろです。竹取の翁が竹取りに出掛けて、根元が光っている竹があり、切ってみると小さな女の子が出てきました。私は自分の妹が生まれたような錯覚を覚えた記憶があります。

二つ目は美しく成長したかぐや姫を妻にしたいと求婚する公家たちが集つてくるところです。かぐや姫は、皇子、大納言、中納言、右大臣などに難問を投げかけて求婚を断ります。どの求婚者も高い身分の人たちです。ここにも、竹の中から生まれたかぐや姫が、高い身分の人たちに屈しない痛快さがあります。

三つ目、ここはこの物語のクライマックスです。夏の夜、かぐや姫が暗い顔をして泣いていました。竹取の翁がかぐや姫に尋ねると、かぐや姫は、自分はこの世の人ではなく、天に戻っていかなくてはならないと告白します。かぐや姫が来て以来、老夫婦は裕福になり、不自由のない生活になりました。かぐや姫を失うことを怖れた翁はかぐや姫に留まるよう

説得しますが、彼女はどうしても天に戻らなくてはならないと心を変えません。翁は帝に頼んで家の周りを三千人の兵士で警備し、おばあさんはかぐや姫を抱いて土蔵の中に隠れました。ついに、天から美しい着物を着た天人が車を引いてやって来ました。辺りが明るくなりました。天人たちを見た兵士たちは力が抜けて戦うことができません。かぐや姫は、翁夫婦や兵士たちに嚴重に守られていたにもかかわらず、天人に導かれて天に戻っていきます。

絶対不可避の別れ

私が興味を引かれたのは、かぐや姫と翁夫婦との「別れ」です。かぐや姫は翁夫婦の宝ですから、翁夫婦の悲しみは普通ではありません。何としても避けたい別れです。しかし、かぐや姫は「どんなことをしても、避けられません」と翁に告げます。

ここを読んだ時、私の経験とピッタリと重なるものがありました。それは私自身が大阪の淀川キリスト教病院でチャプレン（病院付き牧師）をしていた時の経験です。終末期ガン患者をたくさん見送ってきました。また、病気が発見された時から、ガンという病気を抱えて生きるつらさや苦しさを毎日のように聞いてきました。すべての患者さんに「先生、何とか治らないでしょうか」と言われて、私は言葉に詰まりました。一縷の望みでも見つけたいという生への願望です。特に、幼い子を持つ若い人や、高齢の父母を持つ人は、何とかして死を避けたいと願います。幼い子どもや年老いた父母をみてやりたいと切望します。そんな叫びを聞くたびに、私も自分のことのように心が痛みました。死という別れは現代医学では回避できないのです。ここにあるのは非回避の死の別れの悲しみです。

私は、『竹取物語』が語っている「別れ」は

普通の別れとは違うと感じました。絶対不可避の別れです。この世にはいろいろな別れがありますが、絶対不可避の別れは「死別」しかありません。そう思った時、私の頭では終末期ガン患者の「死別」が重なって見えてきました。現代医学では回避できない「死別」の悲しみです。人間が死ぬべき存在であることは人類の不変的事実です。良い薬が開発され、延命のための人工呼吸器などの技術が進歩して生存率が高まっても、死を避けることはできません。そして、愛する者との死別の悲しみはいつの世でも変わりありません。

病院で見てきた死別、悲嘆と、『竹取物語』の翁夫婦の別れと悲しみが重なりました。『竹取物語』をホスピスの体験の視点から読むと、そこにはすべての人間が負っている死別と悲嘆という避けられない現実があります。『竹取物語』はこの大きな問題を扱っていると感じました。

悲しみの緩和

さらに、もう一つのことには気付きました。

ここには死別の悲しみを緩和する鍵があることとです。『竹取物語』では、天人たちがかぐや姫を迎えに来る場面が美しく描かれています。ここでは「別れ」を天からの「迎え」と理解しています。その迎え方も、天人は車を引いてかぐや姫に最大の敬意を払って迎えます。ここには死の不安や怖れを緩和して死後への希望を見つけ出そうとする意図が見えます。

患者さんはしばしば「早く迎えが来ればいいのに」と漏らします。また、高齢になり身体が不自由になった人が「もうそろそろお迎えが来ればいい」と言う言葉を聞きますが、日本人の心の内には死を「迎え」ととらえてきたことがわかります。この物語が死別の悲しみを扱いながら、死は天に「迎えられる」と考えたことは、驚くべき知恵です。日本人

は死を明るく理解しています。

死後の世界

さて、この世から別れて人はどこに行くのでしょうか。

天人に伴われてかぐや姫は天に戻っていきましました。そして、天の国の人たちは親切で優しい人たちです、とも書いています。また、向こうの国では人は年を取らないとも書いています。この世の人間の煩わしさや老いる悲しみから解放された楽園がイメージされています。年を取ることも別れることもなく、安楽にいつまでも過ごせる世界です。

日本人はいつ頃からこのような考え方をしたのでしょうか。実は、『竹取物語』は、大きく分けて三つの資料から書かれたことがわかっています。かぐや姫が竹の中から誕生する個所、五人の貴人に求婚される個所、それと天に帰還する個所です。この三つは、最初は

別々の物語として存在していました。その三つの物語を資料として組み立て直してできたのが『竹取物語』です。最初と最後の箇所は日本の古い民話で、五人の貴人の求婚の部分は漢籍の素養のある人によって書かれています。民話の部分は、似た民話が各地に残っています。民話は人々の口から口に語り継がれて出来上がったものです。口伝という形で伝承される過程で、人々の苦悩や願望が物語の中に入り込んでいきました。『竹取物語』には日本人の心情が込められていると言えます。

仏教伝来の年には諸説ありますが、一般的に五三八年ごろといわれています。『竹取物語』の資料となった民話は、仏教伝来以前の日本人の死生観を表しています。仏教は阿弥陀仏の慈悲にすがって極楽浄土に往生すると語ります。『竹取物語』には仏教的救済思想は見られません。阿弥陀仏の慈悲にすぎたのではなく、天から丁重に迎えが来ると考えました。

日本人が死者を見送り、悲しみを体験する中で、美しい天を創造したのだと考えられます。

私は終末期ガン患者へのスピリチュアルケアに関心を持っています。スピリチュアルな世界とは、特定の宗教の枠を超えて神秘的・超越的世界に触れる魂の世界です。現代医学でも終末期ガンは完治できません。「死が怖い」「死んだらどこに行くのか」と泣き叫ぶ患者さんをたくさん見てきました。これらの叫びには心や魂へのケアが必要だといわれています。その一端を担うのがスピリチュアルケアだともいわれます。世界保健機関(WHO)の『専門委員会の報告書803号』では、心や魂へのケアを受けることは患者の権利であると明記しています。現代人は宗教に警戒心を持ち、宗教から離れています。宗教的ケアが困難な人にも、スピリチュアルケアは可能だとわかってきました。スピリチュアルケアは、患者の立場を尊重して、本人の魂に寄

り添い、生きる意味や死後の問題を一緒に探しながら歩むケアです。

すで見ましたように、『竹取物語』は、死を「お迎え」と理解し、死後の世界があると語っています。そうすることでこの物語は、宗教を警戒する現代人の死や死後の不安や恐怖を和らげる「癒しの文学」になっています。それも、現代人が知性や理性という合理性を重視しながらも、どこかでそれを超える神秘的・超越的な世界を求めている魂に触れるスピリチュアルな文学です。仏教が日本に伝来する前から日本人の魂を支えてきた『竹取物語』は、今後も多くの人に慰めと希望を与え続けるでしょう。

私は青年期になってクリスチャンになったのですが、それでも死は天への帰還という思いがどこかにあるのは、幼い時に母が読んでくれた「かぐや姫」に由来しているかもしれません。そんなことを考えると、幼い時に触

れる絵本が持つ重要性を思います。現代人は、科学的思考を尊重して死後の世界など信じない人がほとんどです。にもかかわらず、天から「お迎えが来る」とどこかで感じているとしたら、「かぐや姫」の絵本の影響かもしれません。

子どもの心に死後の世界への夢を育てることは、保育者の務めでもあります。現代は科学的思考方法に頭が固まりやすい時代です。また、成績や成果に目を奪われやすい時代です。夢や想像力を持つ子どもたちを育てたいものです。人生の困難や災難に遭った時に、生きる力となるでしょう。ファンタジックな世界に遊ぶ余裕が、現実を多角的に考える道を開いてくれます。夢の世界を描く『竹取物語』は、いつまでも私たちに心の余裕と希望を与えてくれるでしょう。

昔むかし の キンダーブック

③

子どもと共に見つめる

灰谷知子

(幼稚園教諭)

園長室の書棚にある、古くから大事に保存されてきた本たち。その中に、キンダーブックもひっそりと並べられている。八十年以上の時を経た絵本を手に取ると、新鮮な驚きや発見がたくさんあった。

魅力的なタイトル

ずらりと机上に並べると、一冊ずつの特集が多岐にわたっていることがわかる。前々号の春号で取り上げた「あり」などのように、自然界のさまざまな動植物に視点を置いたもの。紙面いっぱい広がる絵を見てみると、

今すぐにもその実物を手に取りたくなるような魅力にあふれている。そして、「からだをじょうぶに」「せっけん」など、子どもを取り囲む身近な生活を取り上げたもの。その時代の暮らしぶりが目に浮かぶよう興味深い。

「つち」(第十集第十二編)を読む

はじめに、数ある魅力的な絵本の中で私の心に留まった第十集第十二編「つち」(昭和三年三月発行)について簡単にご紹介する。



▲画像1「つち」表紙（昭和31年）

表紙

子どもが何かをお庭に埋めている絵（画像1）。この号は三月の発行。春がもうそこまで近づき、家庭や幼稚園でも芽生えを感じる季節だろうか。子どもが今、まさに暮らしている身近な場面からこの絵本の世界が始まる。

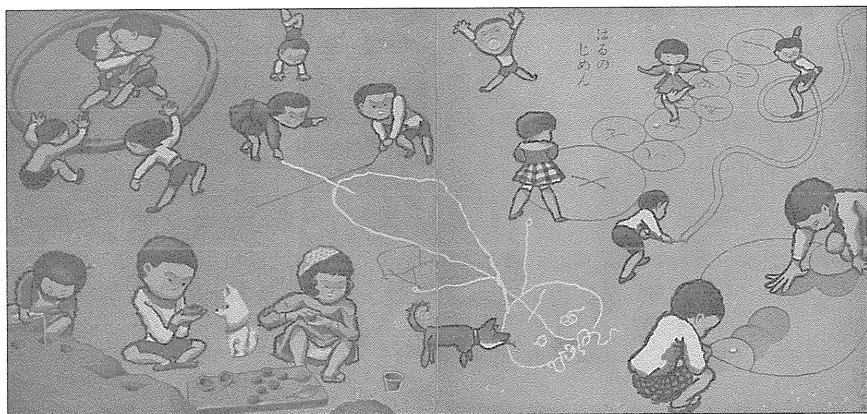
はるのじゅん

見開きいっぱい広がる子どもたちの遊び

（画像2）。黙々と穴に水を注いでいる子。白熱する相撲は、服もめくれ上がり、応援する子たちの歓声が聞こえてくるようだ。石けりをする子は、その跳ね上がった足先から軽やかなステップが伝わってくる。昭和三十一年、その頃の遊び場の子どもたちの躍動感が伝わってくる。この絵本を手にする幼児よりは少し大きい子どもたちのように見える。広場で目にするお兄さんお姉さんへのあこがれのまなざしで、子どもたちはこの絵に引き込まれたのではないだろうか。

つちのなか

野山で枝を拾ったり花を摘んだりする子どもたちの下に広がる、土の中の世界が生き生きと描かれている（画像3）。子どもたちはどんなことを感じながらこの絵を見ていたのだろうか。「カエルが眠そう」「アリは何食べてるの？」子どもたちの声が聞こえてきそう。



▲画像2「つち」(昭和31年)から - はるのじめん -



▲画像3「つち」(昭和31年)から - つちのなか -

おちゃわんのてれびのおぼ

「つち」の特集の最後は、お茶わんを作るおじいさんと、そこに寄り添う子どもたちが描かれている。土そのものを描いてきた最後に、土から作り上げられる身近なお茶わんに焦点が当てられている点が興味深い。「これも土からできているんだね」。夕ご飯を囲みながら、そんな会話を親子で交わしたのだろうか。

「見て見て」～会話が生まれる～

子どもの身近な視点からだんだん広がっていく「つち」の世界。この一冊の絵本を囲む子どもたち、そして親子のたくさんの声が聞こえてくるような気がした。

もちろん一人で見ていても十分楽しいこの絵本。でもこの絵に引き込まれると、誰かとそれを共有したいという気持ちが強くわき上がってくる。それは私も同じだった。園内で

たくさんのキンダーブックを並べた時、思わず「見て見て」と園の同僚に声を掛けていた。

走る生き物たち

「動物が走ってる！」それは第十四輯第四編「ハシレハシレ」（昭和十六年七月発行）を見ていた時に上がった声だ。表紙は子どもが学帽をかぶってメリーゴーランドの馬に乗っている絵（画像4）。そして、絵本の中には、さまざまな乗り物が描かれている。サンリンシヤ、バシヤ、ケーブル……。全編カタカナで



▲画像4「ハシレハシレ」表紙
(昭和16年)

書かれているこの時代。地下鉄、市街電車、そして「シヨウセンデンシヤ」の三層が描かれる近代的な絵に驚いた。「省線電車」と漢字を当てることは、後から調べて初めて知った。

そんな、近代的な乗り物がたくさん描かれている絵本の全ページにわたり、動物、虫が走っている絵が帯状に描かれている(画像5)。猫が走る姿はよく目にするかもしれない。でもカタツムリは走ると言うのだろうか。ゾウが走ったらどんな地響きがするの? キリンの一步はどれだけ大きいのかしら。たくさんのことが気になり、面白くなってキリがない。「どれが一番速い?」なんて考えたら、話題が尽きないかもしれない。実際に見に行ってしまうおうか?

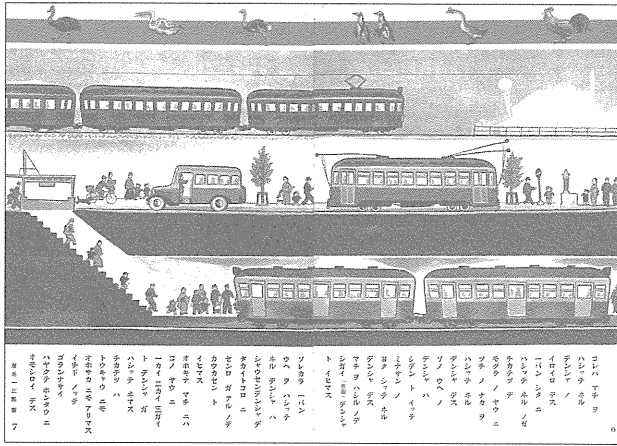
見つける

キンダーブックの世界に引き込まれていた私に、こんな倉橋惣三の言葉があるわ、と読

み聞かせてくれた同僚の言葉が胸に響いた。それは「ハシレハシレ」の冒頭にひっそりと、でも確かなメッセージを持って書かれていた。

「なぜ走るのかしら」。子ども心にも、さうした問題が心に起らないとは限りません。しかし、さういふことを考へる隙もない程、速く走つてゐること其のことを見つめてゐるのが、幼い子の心です。(中略)もの事を一々説明してやるばかりが子どもに科擧させることではありません。子どもに、目をこらし心をつぎ込んで、もの事を見つめさせることが、先づ大きな科擧教育です。そこで、子どもと同じやうに、もの事を、そのまゝに楽しみ見つける力が、わたくし達にもなくてはなりません。

キンダーブックの絵には、心を引き込み、見つめたくなるパワーを感じる。その「見つめる」という行為の中には、さまざまな思考



▲画像5「ハシレハシレ」(昭和16年)から

があふれているように思う。「なるほど」という納得「何で？」という疑問、「そうだよね」と共感を求めたくなる心……。キンダーブックという絵本を間にして、子と子が、子と親が、子と大人が、出会い、共に味わい、新た

な世界を広げていく可能性があることを感じ、私はわくわくした。そして、子どもと共に暮らす中で共に「見つめる」ことから生まれるものを大事にしたいと、改めて強く感じた。

結びに代えて

さて、そんな私がどうしてもしてみたくなつたこと。それは、今共に暮らす幼稚園の子どもとキンダーブックを見たいということだ。以下に、最初にご紹介した「つち」を子どもたちと見た時のつぶやきの一部を載せる。

A児「何で土の中にカエルがいるの？」**B児**「冬眠だよ」**A児**「でもさ、これ冬じゃないよ。だって雪がない」**C児**「でも寝てるよ」**D児**「春なのに？」

春なの、冬なの、どっちなの？ ちよつとした戸惑いから季節の変化に思いを巡らしているようだった。こんな子どもの思いや考えに触れる時間は、豊かで幸せなひと時だ。

1.....7.....28
幼児の教育

アーカイブズとの対話②

56.....109・110

画像にみる「幼児の生活」(2)

— 園庭で育まれる物語へのまなざし

(昭和七年)

—

浜口順子

(大学教員)

今回の二枚の写真は一九三二(昭和七)年十一月号の口絵に掲載されたものだ。倉橋惣三が編輯主幹だった時期である。

いがぐり頭の男の子。セーラー服の襟に白いエプロンの帯がかかる背中越し、レンガを、一心に縦向き横向きに積み上げている。

『いま

おはなしを 聴いてきたばかり、

— 三匹の小豚の—。

マサミさんは一番小さい豚になって
せっせとれんがのおうちを造っています』



浜口順子(はまぐちじゆんこ)
お茶の水女子大学教授。本誌編集主幹。

こちらの写真では、四人の男児たちの中心に何かがいる。……まさか仔犬？

『写真とるんだよ』

ヂツとしておいでよね、

あ、

そっぽむいちゃ だめ。

幼稚園の庭の一すみで

生れた仔犬は、こうした

小さき愛撫のもとに、

まるまると肥って来ました』

八十年前の幼稚園では、庭で犬を飼うことが珍しくなかったのだろうか？ 一番右側の子どもが、左手を仔犬のあご辺りに添えて、ポーズをとらせようとしている。今もこの方、おじいさんになってお元気かもしれない。「仔犬より、その貴方のお姿を今見せてもらっていますよ」と声を掛けたくなる。

園庭で過ごすそれぞれの子どもたちの物語が見える。(一部、現代漢字仮名遣いにしてあります)



講演

お茶の水女子大学ECCCELL 第三回保育フォーラムから

高橋清賀子氏・大戸美也子氏

「幼稚園草創期の保育者に学ぶ」

— 初代保姆 豊田英雄の挑戦(1) —

構成／安治陽子
(大学教員)

「幼稚園の日」特別フォーラム

一八七六(明治九)年十一月十六日、わが国最初の官立幼稚園である東京女子師範学校(現お茶の水女子大学)附属幼稚園が開設された。

ちようど一三七年後(二〇一三年)の同日(「幼稚園の日」)に開催されたお茶の水女子大学の教育研究プロジェクトECCCELL^{*}主催の保育フォーラムでは、最初の幼稚園で日本人初の保姆^{ほま}となった豊田英雄^{ゆふ}(一八四五—一九四一)を取り上げ、まず、ひ孫にあたる高橋清賀子氏(保育史研究家)に、その九十七年にわたる生涯についてお話しいただいた。次いで、大戸美也子

氏(武蔵野大学名誉教授)に、幼稚園草創期における英雄ら保育者の挑戦と、それを現在において将来の保育へとつなげる視点について論じていただいた。その内容を二回にわたって報告する。

^{*}文部科学省特別経費「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」事業。リーダー：浜口順子教授。

高橋清賀子氏講演「豊田英雄の生涯」

1 英雄の家系

豊田英雄は、一八四五(弘化二)年生まれ、父は水戸藩士桑原幾太郎、母は水戸学の統帥であり西郷隆盛も崇拜した藤田東湖の妹雪子

であった。水戸藩代々藩主の命により二五十年にわたって編纂された『大日本史』の編纂にかかわる学者の家系であり、後に結婚して義父となった豊田天功もまた、かの吉田松陰が教えを請うたほどの学者として名高く、『大日本史』の編纂所であった彰考館（現徳川ミュージアム）の総裁でもあった。

2 誕生から幼稚園保姆時代

幕末動乱期に少女時代を過ごし、父は蟄居幽閉の身、付き合いは親戚筋に限るといふ状況であったが、母や叔母と共に書や和歌を楽しみ、学問的には非常に恵まれた環境であった。十二歳の時、弟政が誕生したが、その四か月後に母が急逝、四つ年上の姉立子と二人で弟を育てることになる。英雄はこの時いわば保育実習を経験したことになり、それが後に最初の幼稚園保姆を命じられても動じず任を果したことにつながっているのだろう。

その後十七歳で父を亡くし、十八歳で豊田

小太郎と結婚したが、藩の蘭学修得特待生に選出されるほどの秀才であった夫は、学問を通してヨーロッパを知り脱藩、英雄に「心を鬼にしておれよ」という言葉を残して、京都へ立った。そして、「攘夷攘夷と言つて目を閉じていてはいけない、世界は動いているのだ」と説いた帰り道、堀川のほとりで水戸藩の過激な浪士二人に暗殺された。二十三歳の英雄は、藩命で甥を養子に迎え、豊田家の家督を継ぐことになったのである。

気丈にも英雄は、母や叔母、父や義父から学んだことをもう一度学び直して、近隣の子女に教えようと決意し、夫小太郎が遺した小刀を懐に携えて毎晩勉強に通った。自分を高めることによって、「心を鬼にしておれよ」と言つて京都に立った夫の思いを必ず実現しようと考えたのだろう。二十六歳の時、自宅で開塾、三年後に開校した茨城県立発桜女学校の教壇に立ったが、一八七五（明治八）年、三十一歳の時、東京女子師範学校発足と同時

四等訓導

豊田 芙雄

幼稚園保母専

務可相心得事

但一月金貳圓増給
俸事

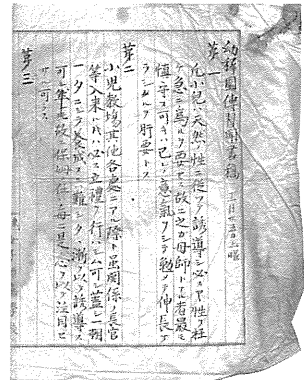
明治九年十月二日

東京女子師範学校

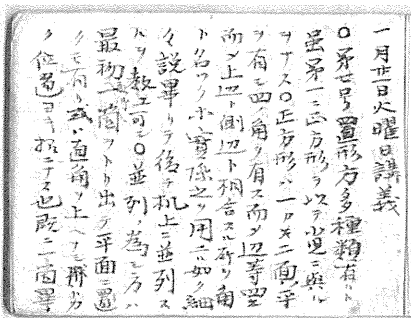
▲画像1 幼稚園保母辞令

に読書教員として抜てきされ上京した。翌年、東京女子師範学校の附属幼稚園が設立されると、第一号の保母に任命され、

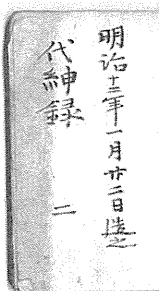
草創期の幼稚園教育の理論と実践の基礎づくりに携わることとなったのである(画像1)。そして一八七六(明治九)年十一月には、幼稚園開園を目前にした研修において、ドイツ人松野クララからフレーベルの理論を教わることになる。附属幼稚園監事であった関信三らが英語から日本語への通訳を行い、芙雄はその内容を「幼稚園伝習聞書稿」(画像2)、「代神録」(画像3)などに書き残している。何度も書き直した詳細な記録であり、複数の稿が残されている。



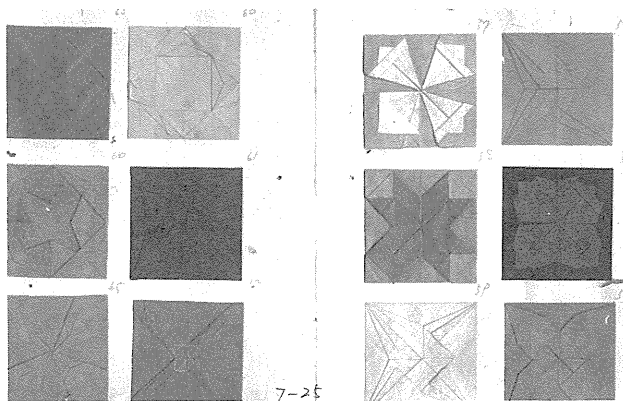
▲画像2 幼稚園伝習聞書稿 (明治9年11月25日)



▲画像3 代神録



フレーベルの恩物についても伝習を受けたが、同じ物が無ければ自分たちで調達して工夫してやっていく、無い物は作る、が信念だったそうである。例えば、今でいう折り紙は、茨城県の和紙を取り寄せ、色を染めて色紙を作ったものである（画像4）。

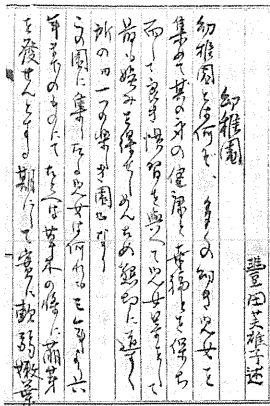


▲画像4 第十八恩物摺紙法

そのようにして二年余り、思いがけない辞令が下りる。鹿兒島へ行って、二番目の幼稚園をつくってほしいというのである。英雄は兄を西南の役で亡くしており、鹿兒島行きを一度は断っている。しかし、東京女子師範学校摂理であった中村正直からの手紙には「あなたが行かないで誰が行くのです、頑張つてらっしゃい」とあり、それに心動かされたのか、三十五歳の時、鹿兒島に向けて旅立った。鹿兒島出張は、当初三か月の予定であったが最終的に一年三か月に及んだ。帰京に際し、英雄は日誌という形で教員らに言葉を残した。「一、庭園に樹木を促すこと」「二、全州図ただし日本図にてもなきにはまされり」と。十年ほど前、鹿兒島大学附属幼稚園で、探していた全州図、古い地球儀が出てきたと言われた。そして園庭では、現在まで樹木草木が守られている。園長室に飾られた写真は英雄のものであり、英雄の言い残したことが、ずっと幼稚園で大事にされていたのである。

東京に戻った美雄は、東京女子師範学校附属幼稚園保母に復帰し、大阪の愛珠幼稚園など後発の幼稚園を支援した。

教育者として美雄が本当にしたかったことは、育幼の責に任ずる者を育てることであった。そのために行くとはいくという覚悟で水戸から上京した。そして一年もしないうちに保母専務となり、幼稚園を立ち上げる。松野クラから学んだこと、そしてその後の実践から、保育について、幼稚園とは何かについて考えた。美雄が書き残した『保育の葉』には、「幼稚園とは何ぞ、多くの幼き儿女を集めて其の



▲画像5 幼稚園とは何ぞ
(『保育の葉』から)

身の健康と幸福とを保ち而して良き慣習を与えて儿女等をして最も嬉しみを得せしめんため懇切に導く所の『一つの楽しき園』なり」とある(画像5)。美雄が考えたことは、今も変わらない保育の大切なことである。

その後、四十三歳の時、水戸徳川侯爵夫妻に同行して欧州へ行き、女子教育、幼児教育について欧州教育事情を視察した。イタリアでもパリでも、非常に楽しかったという。当時の写真を見ると、悲しいことの多かった少女時代から、初めて柔らかな幸せそうな顔になれたのではないかと感じる。

3 女子教育時代から晩年

欧州での経験から持ち帰ったものは、寄宿制の女学校「翠芳学舎」の設立につながった。一八九四(明治二七)年、五十歳になった美雄は現在の東京有楽町、数寄屋橋の辺りに二階建ての女学校を建て、フランス語も教えるなど、最先端の女子教育を行っていた。しか

し一年で閉校にし、宇都宮に赴く。ドイツ公使であった西園寺公望が帰国し、宇都宮の高等女学校を立て直してもらいたい、とのたつての願いがあつたからである。生徒が七名になつていた女学校を、七年間で三百五十人の女学校に立て直した。そして五十七歳の時、惜しまれながら水戸へ帰り、茨城県女子師範学校と茨城県立水戸高等女学校に赴任した。七十八歳まで勤めた女学校（現 茨城県立水戸第二高等学校）には、今でも正門前に英雄の像がある。七十三歳からは大成女学校に呼ばれて教員になり、七十九歳から八十三歳までは校長として勤め、その後、九十一歳まで現役の教員として勤めた。九十歳を過ぎてもしゃんとして、身だしなみ、姿勢、なすこともきちつとしていたと伝え聞いている。

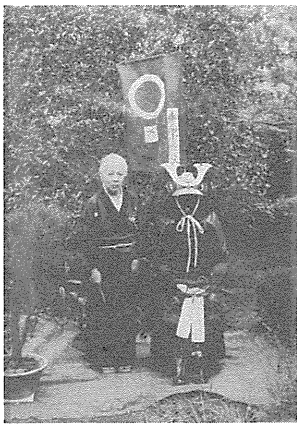
晩年は、非常に穏やかな時間を過ごした。そして、大きな出合いが三つあつた。

一つは、夫との再会である。夫の鎧などが掘り起こされ、京都から水戸へ戻ってきたの

である。やっと会えた、再会できた、と喜んだという（画像6）。

二つ目は来日したヘレン・ケラーを水戸駅に出迎えたことである。英雄は、欧州の女子教育事情を視察した際、しっかりした女子がたくさんいる、日本もこうあるべき、これを望むと報告書に書いている。

三つ目は、ひ孫との生活である。私が生まれたのは英雄の最晩年で、一緒に過ごしたのは三年間ほど。実際の記憶はないのだが、写真を見ると、楽しんでくれたんだな、プレゼントができたんだな、と思う。一九四一（昭和十六）年、九十七年の生涯を閉じた。



▲画像6 夫との再会

4 命をかけて守った史料

豊田天功、小太郎、英雄の物品、史料は四千点以上ある。そのうち英雄の物、千四百七十二点の中から三百点に絞って、昨年「大洗町幕末と明治の博物館」で展示をしていた。いた（企画展「日本人初の幼稚園保姆 豊田英雄」幼児・女子教育に捧げた九十七年の生涯（平成二四年十月二十日～十二月十一日）。

戦前、倉橋惣三先生が家にいらして、英雄が生きている今なら幼稚園史が書ける、最初の時の物が全部ある、と言ってくださった。英雄が一生懸命整理をしていた物を、いらっしやれば差し上げ、お貸ししていたのだが、しかし戦争や地震があり、それらがすべて焼けてしまった。このことに、当時三十代だった父（健彦、英雄の養子伴の次男）は大変傷付いた。そして、倉橋先生に申し訳なかったと思うのだが、「もう手放せない。あんなに英雄が大事にしていた物は、もう自分の魂で守るしかない。みんながそうやって守ってくれ

ても守りきれないのだから、やはり身内が守るしかないんだ」という固い気持ちが見えなかった。戦後、倉橋先生と学生の方がお見えになったのだが、申し訳ありません、お引き取りください、これは、身内の魂で守るしかないのです、と申し上げたのであった。

戦時中、父は林野庁に勤務していたが、松戸に十四メートルほどの防空壕を掘り、そこに桐の箆たすを置き、文書や鎧などを保管した。戦後は東京木場に製材所を開き、大きな水害に何度も見舞われた。重い机も浮くほどだった時は、そこに畳を三枚乗せ、その上に箆筒を乗せてしのいだ。雨にぬれた文書は私たち子どもが乾かして、再び大切に収めた。隣が火事になった時には、父が火の粉を浴びながら般若心経を夢中で唱えて守ったのを覚えてる。

父が亡くなった後、弟が三人いるが、私が受け継いで保管し、今日このようにお話をさせていただいた。―続く―

*文中の年齢はすべて数え年です。

子ども学の

ひろば

お便り

POST

◇ 読者から ◇

日本保育学会第 68 回大会 (in 名古屋) に行ってきました。

初参加で多くの刺激をもらいました。特に、学会企画のシンポジウム「質の高い保育は実現できるのか」の中で、できる・できないという成果主義的な立場ではなく、能動的な学び手＝子どもの主体性の尊重という立場をとり、子どもの遊びの質をしっかりと見とっていく重要性が話されていました。これは、小学校教育でも共通するものだと思います。改めて、教師の専門性が問われていると思いました。(T)

学会企画シンポジウム「質の高い保育は実現できるのか」で、神戸大学の北野幸子先生が発言された「二項対立的構図からの脱却」という言葉に刺激を受けました。その言葉と、その後参加をした自主シンポジウムで語られた「二人称的かかわりの構図」が関連性を持って私の中で結び付き、今も心の中で響き合っています。(I)

実行委員会企画シンポジウム「生命観を軸とした保育のパラダイム」での森岡正博先生(哲学者、早稲田大学教授)の講演に感銘を受けました。人間が一つのからだとして「まるごと」生成していくという権利に、人間のいのちの尊厳を見いだそうとするお話は、保育とのつながりを感じるとともに、保育の世界の奥深さと切実さを改めて実感する機会となりました。(N)

絵本の紹介

『てんじつき さわるえほん ぐりとぐら』

中川李枝子 作/大村百合子 絵
福音館書店 2013年

読んで楽しい『ぐりとぐら』は触ってもっと面白い。樹脂インクの透明な凹凸を、目で確認してさらに面白い。1963年に出版されたご存じ「ぐりとぐら」の誕生50周年記念に出されたのが、このてんじつき(点字付き) さわる絵本です。

目を閉じて、指先に神経を集中させて絵本を読んでもみると、いろいろな手触りを感じます。点字を読めない者にとっては点字であることが辛うじてわかるブツブツ。ぐりを表す赤色の帽子や服のストライプ。ぐらを表す青色の帽子や服のドット模様。また、森で見つけた大きな卵、大きなフライパン、そして、読み手の誰もが憧れるふわふわのカステラ、とそれぞれ特徴的な手触りに作られています。それらに触れるワクワク感の一方で、形状や大きさを触れることによって認識する難しさを改めて感じます。そして、「見えない世界」というよりも「視力に頼らない世界」を生きる人たちの空間認識や知覚の深さ・豊かさを想像して、いたく驚嘆したりするのです。

(KT)

お茶大子ども学ブックレットの紹介

お茶の水女子大学ECCELL企画のシンポジウム、フォーラム、特別講義などを記録した冊子です。

Vol.6 第8回お茶大ECCELL子ども学シンポジウム
「鼎談『子ども・戦争・歴史』」(H26.11.21 開催)

【本田和子・宮澤康人・山本秀行】

Vol.7 第6回お茶大保育フォーラム

「認定こども園の今とこれから」(H27.3.15開催)

【講演者：無藤隆・渡辺英則】

実費(1冊500円+送料)にてお分けします。ご希望の方は、下記までお問い合わせください。

ECCELL 事務局 nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp

編集後記

「おやまに、幼虫探しに行こう！」と誘われ、子どもたちと園庭の高台に出掛けました。「確か……この辺にいたはずだ……」と、お目当ての幼虫と出会うため、ひたすら地面を掘り続ける子どもたち。ほとんど会話もなく、それぞれに自分の思う場所を掘り続けているその姿を見ながら、「夢中を生きるこの子どもたちは、おそらく『夢中』についてなど考えたりしないのだろうな」と、ふと感じました。「ほどほどの夢中」を良しとしようとする保育者の評価的な見方に対する星先生のご指摘（今号特集《view 視野》）にもドキッとさせられました。

子どもの頃の、時を忘れ、ひたすら遊んだあの身体感覚を取り戻し、季節の良いこの時期、何かに夢中になってみようかなと思ったものの、そもそも「夢中」とは、なってみようとしてなるものではないのかもしれない。ひたすら夢中になって遊び、

没頭することそのものを楽しんでいる子どもたちの「今」を、私はどれだけ保障できているかしら？ と自分の保育を改めて振り返る時間となりました。

さて、特集「保育現場で気になるコトバ考」は、次回で8回目を迎えます。保育の中であまり意識せずに使っている言葉の一つ一つを、少し違った角度からとらえ直してみることで、子どもたちとの暮らしを楽しむ新しい道が開かれていくことを目指しています。

今回は「行事」についてです。運動会、遠足、学芸会など、秋は行事が盛りだくさん。「楽しいはずの行事に追われて大変！」という声が現場からよく聞こえてきます。そもそも行事とは何のためにあるのでしょうか。季節の変化をその折々で楽しんできた日本の文化にも思いをはせ、改めて考えてみたいと思っています。(S)

次号予告 幼児の教育 冬号 2015年12月刊行予定

新企画、新連載が好評！ 充実した内容でお届けします。

特 集 保育現場で気になるコトバ考 8
— 「行事」って何だ？ — 磯部裕子氏ほか

シリーズ 子どもが育つ場所から
京都市立中京もえぎ幼稚園

コーナー 古典の散歩道 第8回 井原成男氏

※タイトル内容が変更になる場合もあります。

幼児の教育 秋号 第114巻 第4号

平成27年10月1日発行

編集発行人／浜口順子

編集担当／田中恭子

発行所／日本幼稚園協会

〒112-8610

東京都文京区大塚2-1-1

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発売所／株式会社フレーベル館

電話：03-5395-6604(編集)

振替／00190-2-19640

印刷所／図書印刷株式会社

定価／本体834円＋税

©日本幼稚園協会 2015 Printed in Japan

編集委員／伊集院理子

菊地知子

佐藤寛子

灰谷知子

編集協力／フレーベル館

● ご購入のお問い合わせは、フレーベル館までお願いします。03-5395-6613(営業)●



子どもがもらって
すぐに使える字典

はじめてつかう

漢字字典

小学校6年間で学ぶ漢字を学年別に示しました。子どもの生活や学習に必要で、よく親しまれていることばを選んで作られた字典です。絵を見ただけで漢字の意味と形と読み方がわかる「絵場面」など、新しい工夫も充実！ 全ての漢字にふりがな付き。

商品コード 303-50 定価 税込 1,000 円 (本体 926 円 + 税 8%)

村石昭三 / 監修 首藤久義 / 編著 坂崎千春・井上雪子 / イラスト
浅葉克己 / 古代字 祖父江 慎 / デザイン

セット内容 本体 1 ビニールカバー付き 規格 22×15 cm 400 ページ
ISBN 978-4-577-81372-0



POINT 1

1年生や幼児でも引くことができる

巻頭に、読みや画数、部首がわからなくても、絵から漢字を引くことができる絵場面索引付き。自分で字典を引く自信がつかます。絵場面索引は、1、2年生で習う全ての漢字を取り上げ、漢字の意味やはたらきに応じて、漢字同士の関係がわかるようになっています。

漢字の横にある数字のページを引くと、「色」という漢字を調べることができます。

絵場面索引は、ほかの字典にはない、この字典だけの大きな特長です。

POINT 2

部首索引にもひと工夫



部首索引を工夫し、引くときのイライラを少なくしました（部首・部索索引）。例えば「思」「安」は…。

本来の部首である「田」から引くことができます。

部首ではない「心」からでも引くことができます。

本来の部首である「宀」から引くことができます。

部首ではない「女」からでも引くことができます。

※全ての部品が引けるわけではありません。よく目立つ、代表的な部品を厳選して索引にしました。



109-49

子どもがひとり 笑ったら…

小西貴士先生の写真集第三弾。森の自然のなかで繰り広げられる、子どもと大人の間でも素敵な関係を写真集にしました！子育て中のパパやママにもおすすめの1冊です。

小西貴士／写真・ことば 24×18 cm 72ページ
定価本体 1,600 円＋税 ISBN978-4-577-81386-7

● 好評発売中 ●

子どもと森へ 出かけてみれば



109-20

今、注目の「森のようちえん」。八ヶ岳山麓の大自然で生き生きと育つ子どもたちの写真にやさしい言葉を添えたとおきの1冊。

小西貴士／写真・ことば 24×18 cm 76ページ
定価本体 1,500 円＋税 ISBN978-4-577-81292-1

子どもは子どもを 生きています



109-41

子どもたちが子どもである今を生きている姿を鮮やかに切り取った写真とことば集。今を精一杯生きている子どもと大人へ心を込めて贈ります。

小西貴士／写真・ことば 24×18 cm 76ページ
定価本体 1,600 円＋税 ISBN978-4-577-81352-2